

に起源せり、彼の創世記に神天地を創造するに六日の日子を要し、第七日に於て神は自己の成効を祝して安息せりとの口碑に原づける猶太人の遺風なり、然るに基督教徒は口碑に所謂基督死後の昇天日は一週の始たりしとの故を以て、其安息日を改めて日曜日となし、之を安息日とのみせずして祝日とせり、然るに基督教徒にして今猶ほ日曜日と以て猶太流儀の究屈なる安息日とのみ思ひ做す者少からず、現今此一週間一日の休暇を定むるは歐米各國一般の風俗となり、近年我が國に於ても亦日曜日を以て諸官省學校及び會社等の休息日となれり、是れ一は各國と交際上の便利より出づるものにして、又一は七日間一日の休息を與ふる風習は國家が或る社會に與ふる恩惠たる可ければなり、故に今日吾人は此恩惠に霑ひ、之れを以て宗教的性行の發達を助長する處の課業を修

むるの用に供するものにして、吾人豈敢て日曜日は他の六日よりも特に聖なる日なりと迷信せんや、國家若し一六の日を以て休日とせば吾人は喜んで之れを利用すべし、然るに世人往々日曜日を以て外國の御祭の如く誤認し、若し此の日に於て宗教的事物の攻究を爲す者あらば、直ちに之れを以て外國の宗旨家なりとするは淺近と云はざるを得ず、是れ恰も「ズボン、マントル」の兵士を見て盡く外國の兵士なりとすると同様にして、事理を解せざる者と云ふべし、譬ひ外國の衣服たりとも、一旦之れを自國に採用せば、既に自國の服制なり、故に一週間の日即ち土曜日の休暇は元來猶太人の風俗にして、基督教は之れを日曜日に改め、歐米諸國に基督教の傳達すると同時に、歐米人の風俗となり、今や又我が國風の一部たらんとするに至れるものなり。

問 聖人の降誕を祝するは如何。

答 吾人は現今四聖人として、釋迦孔子、耶穌、索克拉底の降誕を祝せんが爲め、毎年四季に一回宛便利なる日を撰びて祝賀の日とす、然れども單に是れ等四聖人のみに限りたるには非ざる可しと雖も、只だ此の四聖人は宗教界、道德界に代表的人物たるを以て、此の四聖人の名の下に一切の聖賢の記念を含蓄するものなり、之れに依りて古への大徳を追懐し、之れを贊嘆し、以て吾人が徳性の「リヂイヴアル」(興奮)を催進するものなり。

禮拜

問 太古の人種は如何なる行爲に依りて、神の恩恵を得べしと想像せ

しや。

答 未開にして野蠻なる太古の人種は神を以て當時の未開なる人間

社會の專制と抑壓とを恣にせる帝王の如き者となし、之れが恩恵に浴せんと欲する者は貢物を供奉し、其の威力を謳歌し、其の前に拜跪するを以て第一の勤務となし、之れに依り始めて神の満足を購ひ得べきものなりと想像せり。

問 現今の社會に於ても亦如此方法を以て禮拜の要素とせるものな

さや。

答 現時通俗の宗教社會に在ては猶ほ神を以て或る恐る可く親む可からざる王者の如くに想像し、斯る卑近の行爲を以て神佛に奉仕する者少なからざるのみならず、或る社會に於て斯る卑近の行爲を以て全く宗教的本質とし、少くとも宗教的最大緊要條件の一と

思考するものあり、是れ等は猶ほ蠻風を脱せざる下級の宗教的恩
想にして、早晚此の社會より消滅し去らざる可からざるものたる
べし。

問 禮拜とは如何なるものなりや。

答 禮拜とは自己の信奉する神に對つて恭敬愛慕の至情を致すの謂
にして、神の稜威と智能、神の善美と仁愛を吾人々類の衷心より欽
賞嘆美するの真情を云ふ。

問 敬神の至情を表明するに當りて、吾人は如何なる方法を用ゆ可
や。

答 吾人は健全なる感情の法則に従ひ極めて適當なる方法に依りて
敬神の衷情を致すを得べし、一例を以て云へば、吾人の潔白なる感
情をして益々高尚ならしむるを得可き、純潔高尚なる詩歌を詠吟

し、以て其の至情を迸出せしむるを得べく、或は自己の赤心を神前
に捧げ俯仰以て天地の間に耻ぢざるの言行云爲あるは是れ即ち
敬神の至情を表白するものと云ふべし、故に各國の人民は既に
世間に認識せられたる人類理想結合の法則に隨ひ、自然に或る一
定の場處或は境界に於て人間の高尚なる思想及び感情の發動を
助長せんが爲めに、各國各邑の人々、威な宮殿堂宇を建築し、以て衆
人禮拜の聖所となすものなり。

問 敬神の念慮は、何を以て人間に向つて斯く必要なるものなりや。

答 敬神の念慮とは善徳を欽賞愛慕するの謂にして、善徳を瞻望する
者は既に善道の方に傾注す、善道は人間社會一日も缺く可か
らざるものなるを以て敬神の念慮の必要なる由縁夫れ茲に存す
るものと知るべし。

問 感謝とは如何なるものを云ふや。

答 感謝とは懇切慈悲恩愛を受けたる時之れを喜び且つ之れに酬ひんとする義務の感情を云ふ。

問 神は人類の感謝を要求するものなりや。

答 吾人不肖者の感謝無限の神に於て何かあらん然れども恩を受くる者は之を喜び之れに酬ひんとするは人心自然の通則にして吾人は之れに依りて自己の内界の神性と徳性を損傷し或は汚濁するものに非らず、反て高尚なる自己の道心を涵養し満足せしむるを得可ければ、人の天恩に對して感謝の情を發動せしむるは至當の所爲たるなり。

問 吾人の眞實なる禮拜は果して神慮に適ふものなりや。

答 然り、嚴肅なる眞誠の禮拜は愛の裡に在て神の聖旨を吾人々間の

意思と一致せしめ得るを以て、吾人は宗教的に之れを云へば、神の聖旨に適ふものなりと云ふを得べし、何となれば神は愛なり、而して神の子たる吾人の生命は此の一致の場合に於て全然愛の一點に集注し終に純愛に化すべし、故に神其の愛を喜び給ふ、されば愛の精神なきの禮拜は所講蛙鳴と一般にして徒事たるべし。

問 教會等に於て衆人相共に神を禮拜するの主意如何。

答 正義と仁愛を尊重し、之れに従順なる可きは何人と雖も皆同一轍にして其間敢て異背なかるべし、然らば即ち斯る自然の一致を以て衆人相共に敬神の念慮を表章するは彼の偽善者流の他人に見られんが爲めにする虚禮に陥らざる限り大に人生を裨益するものなり、何となれば之れに依りて吾人々類は天父の下に在て盡く同胞なりとの感をして益々深からしむるを以てなり。

問 活ける禮拜とは如何なるものなりや。

答 善良なる思想言行即ち善良なる生涯は吾人之れを眞誠なる禮拜と云ひ、此の禮拜は靈と誠とを以て恒の心となせし結果たるが故に神は如此靈と誠とを以て拜する者を愛て給ふ、神は既に世俗の經跳者流の燔祭或は長廣舌にして虚飾的禮拜に厭さ給へり、故に吾人は人間の善良勤勉なる生活を以て之れを生ける禮拜と云ふ。

祈 禱

問 核提の嬰兒が兩親に向て懇求する目的如何。

答 嬰兒は之れにより兩親の意思を任げて、自己の意思に同情を表せしめんと欲するものなり。

問 斯く幼稚の域を脱せる小兒にして、猶ほ是れと同様に思考するものなりや。

答 小兒は漸次身體と智力との發達するに従ひ、自己の意思よりも兩親の思想は遙かに事物の利害を辨別し能ふものなる事を知ると共に、慈愛ある兩親は何事に限らず、萬事其の子女の爲めに利益を圖るものなるを知るに至る、故に智識の耕耘を始めし小兒は父母に對し強て我慾の遂行を主張せざるに至るべし。

問 善良なる父母の家庭に生長せし子女は如何なる事を其の兩親に求むるものなりや。

答 斯くの如き子女は其の父母の意旨のある處を觀察し、一意専念之れに従順ならん事を期するものなり。

問 親子間の最高尙なる關係は如何なるものなりや。

答 親子たる者は互に其の意思の交通によりて好意と同情とを表章するものにして、親は只だ子の爲めに盡し、子は又父母の高恩を報ひんと務むるは人心自然の至情にして、世上若し道徳と名づく可きものあらば、余輩は此の至情を以て其の第一に位するものなりと云ふを憚らざるべし。

問 如何なる小兒は強て其の父母の眷顧を貪り求むるものなりや。

答 頑是なき者、無教育なる者、利己心深き者は其の父母の恩顧を貪らんとするものなり。

問 如何なる小兒は父母の眷顧を貪らざるものなりや。

答 思慮深き者、親切なる者、孝心なる者は敢て兩親の恩顧を貪り求めざるものなり。

問 他人よりも猶ほ更らに多量の幸福を得んと欲して、神に向ひ頻りに祈禱し懇求する者は果して思慮深き者なりや。

答 斯の如き者は淺慮なる兒童に等しく、彼れ等は自己の賤しき懇求に依りて神の聖なる意思を翻へし、以て自己の賤劣なる私慾に服従せしめんとする者にして、要するに斯くの如き者は神聖なる天父を以て己が利慾の奴僕と爲さんとするものにして、木に縁て魚を需むるよりも遙かに難事にして、必らずしも其の目的を達し得らる可きものには非ざるなり。

問 何をか神の聖旨と云ふや。

答 神は一視同仁の聖旨を以て此の蒼生を赤子の如く鑑給ふが故に人にして求めざるも、之れが爲め常に其の必須なる幸福を吾人に給與せんとするものなり、故に古人の歌にも「心だに誠の道に適ひ

なば禱らずとても神や守らん」と云ひしは是れ之れを云ふなり、

問 利己的祈禱は何に比すべきや、

答 是れ恰も無學文盲なる兒童の頑是なき請願に等しく、之に對して

傾聽の價なきものなり、

問 如何なる祈禱は神慮に適合し、此の宇宙進歩の方針に契合するや、

答 此の宇宙は天父の宇宙にして、森羅萬象は盡く共に正善の方向に

進歩せるものなれば、此の神聖なる天然力の傾向に伴ふ可き正善

と愛心との企望を表白するを以て、適當なる祈禱と云ふ、

問 聰明なる人の高尚なる冀望は如何なるものなりや、

答 神の聖旨を枉ぐるに非ずして彼の意思を以て神の聖旨を迎へ、以

て神の聖旨の天地間に成就せん事を冀望するものにして、換言せば

畢生の力を盡くし、以て天地の化育を贊くるに在り、

問 然らば斯の如き祈禱は如何なる種類のものなりや、

答 是れ即ち最高尙なる祈禱にして、自己の欲望の全體をも擧げて神

慮に委ぬるものにして、聖旨の儘に成し給へと祈るが如き類なり、

問 神と人との交通とは如何なる事柄なりや、

答 人類天稟の靈性により神の仁愛を感じ、正義を歎び、眞に安心を得

たる心靈の状態を以て、神人の和合、或は交通と云ふ、斯の如き場合

は人間に在て其の最醇、最良、最明、最智、最靈にして、且つ生命の最高

調に達せし時なるべし、此の際に於て、人は能く自他に有益にして

且つ自他に幸福なる事物を明察するを得べし、故に「至誠如神」とは

斯る状態を指示せるものと知るべし、

問 人の正當なる冀望は、祈禱のみにて満足を得べきものなりや、

答 此の冀望は之れを内界のみに潜伏せしむ可きものに非ず、必ずし

も之れに適ふ處の動作を伴はざる可からず是れ即ち勤勞は祈禱たる由縁なり故に人は善を行はんが爲めに其の精神と肉體の全力を集注するを以て圓滿具足の祈禱とは云ふなれ。

問 吾人自己を以て全く正善の指令に一任せる場合に於ては如何なる状態となるや。

答 斯の如き時に於て神の力と愛とは吾人の裡に在て活動するを以て何事として成らざるなし所謂精神一到の場合にして難事に接するも平然として遂げざれば止まじ。

問 然るに何を以て世間善人の冀望が速かに達せらるゝ事なきや。
答 如何となれば此の世界は法則の世界約束の世界秩序の世界進歩の世界なるを以て時間も亦其の約束の一にあり而して悪人の慾望は淺近にして暫時に止るものなれば隨て又暫時に達するを得

べし然れども善人の冀望は即ち神の聖旨にして遠大なり大器晩成の法則に適合せるを以て天國の地上に建設せらるゝは即ち人界進化の極處に達せるの狀態なり故に眼前に善者の冀望の達せられざるに依り益々其の冀望の價値を推知せらるべし聖訓に曰く「終り迄て耐へ忍ぶ者は幸福なり」と吾人は晩成の故を以て其の冀望を放擲せず落膽せず反て晩成は其の大器を自證せりとして安心し樂て天の命を享けんとするものなり。

問 耶蘇は如何なる祈禱の標本を吾人に示せしや。
答 耶蘇は當世の人に告げて曰へらく「爾祈る時に偽善者の如くする

勿れ彼れ等は人に見られんが爲め會堂や街衢の隅に立ちて祈る事を好む我賊に爾等に告げん彼れ等は已てにその報賞を得たり

(他人より熱心家と思はれしのみにして必竟他人に見られんが爲め) 爾祈るに熱心家と思はれしのみにして必竟他人に見られんが爲め) 爾祈るに熱心家と思はれしのみにして必竟他人に見られんが爲め) 爾祈るに熱心家と思はれしのみにして必竟他人に見られんが爲め)

る時は嚴密なる室に至り、戸を閉ぢて隠微たるに在す爾の父に祈れ、然らば隠微たるに鑑たまう爾の父は明顯に報ひ玉ふべし、爾祈る時は異邦人の如く重復言を云ふ勿れ、彼れ等は言多きを以て聽かれんと思へり、是故に彼れ等に倣ふと勿れ、爾曹の父は求はざる先に其の需用物を知りたまへばなり、然れば爾曹かく祈るべし、天に在ます我儕の父よ、願くは爾名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成る如く地にも成せ給へ、我儕の日用の糧を今日も與へ給へ、我儕に罪を犯すものを我がゆるす如く、我儕の罪をも免し給へ、我儕を試惑に遇せず、惡より救ひ出し給へ」と、又曰く「神は靈なり、之れを拜する者も亦靈と誠實とを以てすべし、神は斯く拜する者を需給ふ」と教示せり。

秩序と奇跡

問

外界即ち物質界の最大不可思議とは如何なるものなりや。

答

外界に在て、其の最大不可思議なる事實とは、即ち宇宙に秩序の整然たるの事實なり。

問

此の宇宙は自然の法則に準じて運行すと云ふは、宗教的に於て如何なる意味なりや。

答

天則即ち秩序なるものは神の間斷なき無限の聖旨の現象にして、此の宇宙は即ち神の無盡なる善意の運動なりと云ふに同じ。

斯の如き自然界の秩序は吾人に向て如何なる關係あるものなりや。

答

是れ吾人を益する至大なり、何となれば若し世界に秩序なかりせ

ば吾人何によりて此の世界に信認を確立するを得んや、此の秩序整然亂れずして始めて吾人が依て以て安心の基礎を定むるを得、故に此の秩序の亂れざるは即ち神の聖旨の亂れず眞實なる事實を吾人に立證するものにして、之れに依り吾人は確實なる宗教的信仰の基礎を定むるを得可きものなり。

問 天地間に偶然發現する事物の新奇にして秩序なきが如き事實あるは如何。

答 新奇にして既定の秩序に相應ぜざる事物の發作は逐次研究の結果によりて、將來闡明せられ得可きものにして、今日まで吾人の發見せしもの實に夥多あり、然れども古代の人類は斯る新事物に接する場合には、直ちに之れを異能、奇跡、休徵、奇瑞と呼び、或は之れに依りて神の震怒を表示するものなりとし、彼の北光の如きは古昔

の希伯來人は神の奇瑞を人類に默示せるものとなし、支那に在ては今日猶ほ日蝕月蝕を以て鬼神の憤怒を皇帝の不徳の上に漏すものとして、朝廷に嚴肅なる儀式を張て鬼神に謝するの制あり、惟ふに無文の人種は如此、遇然の(遇然に非ざるも一見遇然の如きもの)事物を以て、普通一般の秩序を経ざる神の特別例外(特別例外)の行爲となし、隨て之れに異能、休徵、祥瑞の稱を加へたり、然るに今日の學者は斯の如き新奇なる事物にも、亦必らず秩序の整然たるものあるを知るが故に、單に新奇の事物のみならず、平生吾人の怪まざる事物と雖も、盡く靈妙不可思議を感ずべし、何となれば秩序は已てに大不可思議なる神の大聖旨の發動たるを以てなり、換言せば宇宙萬有は盡く神の聖旨を記述せる一大書繪館なればなり。

問 人間にして奇跡、異能を表はし得べきものありや。

答 今日の社會に於ても猶ほ如此奇跡異能は或る特殊の人々又は宗教家には施行し得可きものなりと迷信せるの徒夥多あり彼れ等は之れに依り凡俗の歸依を求むるの具となせり故に今若し彼れ等の宗教より斯る奇跡談を撤去せば其の宗教は立處に倒碎するを免かれず隨て凡俗の宗教に於ける奇跡談は直ちに宗教の眞髓を形成せるものにして或るキリスト教徒と雖も今猶ほ奇跡論を辯護しキリストの奇跡談を以て歴史的事實なりとせるは大なる誤謬なり勿論古代に在つて斯かる奇跡談は今日の如く俗間に流布せるは事實たりとするも之れによりて奇跡其の物も亦歴史的事實なりとするは過信も亦甚だしからずや何となれば目下或る劣等の宗教社會に在て奇跡を行ふ者ありと信ぜらるゝは實際の事實なるが故に奇跡其のものも事實なりとの結論に達す可くんば

可なるべし然らざれば吾人何を以て斯る古人の迷信を其の儘譲り受くるを得可けんや現に教法歴史中の奇跡にしても最初は舊約全書中の奇跡も盡く實際の事實としキリストの奇跡は勿論パウロを始め使徒等の奇跡より羅馬教會の高僧等が行へりとする奇跡談も盡く事實として信ぜられたり然るに近代に至り新教の勢力次第に旺盛となるに及んでや羅馬教會の高僧等の奇跡は最初新教徒の否定する處となり聖書の批評的研究により舊約の奇跡談は否定せられ終に使徒の奇跡談も今日之れが辯護を試むるものなきに至れり然らば此の次は何人の奇跡を否定するの秋なりやキリストの奇跡談は今や將に風前の燈火の如き境遇に接せり然り而して今は只だ一種の比喩の如くに之れを解釋せりと雖も惟ふに古代の聖書記録者は必らず當時の社會に行はれたる信

仰を其儘明記せしものたるを以て、恐くは單に比喩のみに非るべし、然れども當時の社會に行はれし迷信は以て直ちに實際の事實なりと云ふに至ては大に熟慮を要すべきものたるべし。

問 神は或る一定の時一定の場處に於て、或る人々をして神の威力を現はさしめ、或は或る人にのみ神の大能力を注入し得べしとする信仰と、萬有は盡く常に神の秩序的意恩に従ひ運行するものなりとする觀念と何れか勝れる理想なりや。

答 勿論乙は甲に比して遙かに高等なる理想と云はざる可からず、何となれば甲は神を以て偏頗なる者、我儘勝手なる者とすればなり、神は秩序の神、公平の神にして、義者不義者にも等しく雨露の恩澤を降し玉ふが如き世の實際の事實と相反すればなり。

死及び死後

問 人間の死とは何ぞや。

答 死とは人間肉體の活動力即ち五官作用の休止を云ふ。

問 死とは人間の罪惡に對する神の罰則なりや。

答 死は生物界一般の通則にして是れ恰も生物に出産の必要あると同時に死の必要條件を伴ふものにして、敢て罪惡に對する天罰に非ざるべし、何となれば、無邪氣無心なる彼の草木すら猶ほ枯死するの通則を免かれざるを見るも亦明らかなり。

問 死は恐怖すべき害惡なりや。

答 否、此の限りある地上に於て限りなく生産の休止せざる限り死の之れに伴ふ事なかりせば、反て大害を來すものなるべし、是れ只

だに人間のみならず、生物の發生するもの盡く死せざる時は數年を出でずして此の世界は自己の發生物を容るゝの餘地なきに至るべし、故に造化は能く此の地上に生死の配合を調理せるものなり。

問 若し此の地上に適當なる生物の數を産し而てし後產生と死去とを廢する時は此の害を避くるを得べきものならずや。

答 夫れ或は然らん、然れども如此するに當り一般の生物界の通則を變更し此の生物をして食はず、寝ねず、増減せず、恰も死せる岩石の如くせざれば、以て生産と死亡とを廢する能はざるべし、故に死亡を廢せんが爲めに、必要上生産をも廢するは結局此の世界をして死滅せしむると同然なり、是れ所謂「角を矯めんとして反て牛を殺す」の愚を演ずるものたるべし、加之限りある生物のみをして、此の

世に在らしめ、他をして生存の恩に浴するを拒むは終に天父の慈心を制限して、有數の生物にのみ私せしむるに外ならず、惟ふに此の世界は恰も或る大演劇場の如く、一日甲者群集して樂みを得れば、去りて次ぎに來らんとする乙者丙者をも其快樂を享受するを得せしむると同様にして、若し有限の坐敷をば同一の客の爲め日々買ひ占めらるゝ事あらば、終に他の者をして其の快樂に與るの機會無からしむべし、故に神は一視同仁の眼を以て吾儕若生を鑒給ふが故に、其の愛子愛女等をして交るゝ父の恩露に霑はしむるものと知るべきなり。

問 然るに何を以て世人は斯く死を忌み恐怖するや。

答 古代より人間社會に傳來せる未來世の恐懼心と死は豫め病苦を伴ひ、且つ親戚故舊に離別せざる可からざるを以て、人情として之

れを恐れ之れを忌むものなるべし、人は自己の未だ経験せざる事
 物は常に忌み或は恐るゝものにして、後日之れを以て日用必須の
 物となすに至る事物と雖も、始めて社會に顯はれ紹介せられたる
 事物に向ひ、人は頑固にも之に反抗を試むるものなり、就中人の死
 を恐怖するは専ら彼の未來生の不安心なる妄想に基くもの多し
 とす、然れども何人と雖も、未だ經驗せざる未來世は果して如此恐
 怖す可きものなりとも斷定する能はざるべし、何となれば吾人は
 生るゝも此の宇宙に於て仁慈なる天則の下に生活し、死するも此
 の仁慈なる神の宇宙神の天則の外に逸する能はざるものたらば、
 現世の生存は左迄て忌み怖る可きものに非る限り、未來世も亦斯
 く恐るゝに足らざるべし、蓋し死に伴ふ痛苦の如きは單に吾人の
 智識未だ健全學の原理を究むるの拙なるが爲めにして、他日此の

原理を達觀するを得ば、死は恰も吾人が日々の業務を終へ、毎夕陶
 然として眠りに就くと一般、其の肉體に於ても、精神に於ても亦大
 に愉快なるものたるに至るべし、現に今日未だ健全學の理を辨ぜ
 ざるも、幸に生來强健にして思想の健全なる者の臨終に何の苦惱
 をも顯はさずして永眠する者あるの一例は、是れ其の五體と精神
 の疲勞を慰するが爲めに安靜なる春宵の睡眠を得るに等しく、彼
 の親戚舊故と離別するが如きも亦暫時の間にして、之れを譬ふれ
 ば東京より西京へ一家の移住を爲す場合に當り、父兄が弟妹に先
 つて發足し、他の家族は各々家に留つて後事を始末し、順次發途の
 支度を爲すが如し、其の親戚舊故と雖も、必らず僅々たる百年以内
 に此の世を發足し、先人の後を追ふて往く者なれば、敢て死去を以
 て人生悲哀の極度とするは豈至當の見解と云ふ可けんや。

問 死は人生の終局なりや。

答 吾人の所見を以て簡短に之れを云へば、死とは將來の生命に移らんが爲めに吾人の心靈が此の肉體を蟬脱するの謂にして、死は吾人の生命を缺損するものに非ざるは、彼の毎夕の睡眠は吾人の生命を短縮せざるのみならず、反て日々の疲勞を慰し、毎朝更らに新たなる事業に就くの勇氣を回復し、益々活潑と熟練とを以て次ぎの職務を成就すると同一にして、吾人は死の夕より更らに覺醒するの曉に於て、現生未完成の狀態を一洗し、遙かに勇壯活潑なる未來の世界に出産するものなりと信ず、如何となれば進化の理法は宇内の大則たる限りは、僅か人間の死の爲めに進化の運命を阻礙し得可きものに非ざるべし、換言せば、死は決して此の宇宙の大法を左右するの權威なきのみならず、死も亦之れに服従し、反て進歩

の運動を補助すべき一箇の方法たるに過ぎざるべし、果して然らば死は人生の終局と論ずるは死を見る事重きに過ぎ、宇内の大法を蔑視するものと云ふべし。

問 死後人の心靈は天堂或は地獄と稱する境土に入るものなりや。

答 吾人は死後の狀態と、死後の住所とを詳論するを得ず、何となれば智識とは人間の確然たる經驗を云ふものにして、吾人死後の狀態は存生中に之れを試験し或は經驗するを得ざるなり、故に吾人は此の現社會に於て正義善道を楽しみ、俯仰天地に耻づる事なく、心靈上安靜にして満足せるの狀態を以て天國となし、之れに反し、人にして苟も不正不善に與し、寸時と雖も心靈の安靜を得ず、廣き世界を狭く渡る者、即ち天地の間に踟躕する心靈の狀態を地獄と云ふに過ぎず、世人は動もすれば善人死せば天國に行き、惡人死せば地

獄に行くとして、之れを遠方に求め、死後に非ざれば善者悪者の居所を定めざるが如しと雖も、吾人は反て之れを遠きに求めず、退て各自現在の心靈の状態を観察すれば、其の甲乙何れの位置にあるやを知るに難からずとす、故に人若し一善を思へば已てに其の人は一步天國の門に入り、一惡を行へば即時地獄の苦に迫らるゝものなりと信ず。

問 然らば人間終局の目的とは如何なるものなりや。
答 或る教法家は人間終局の目的を以て、未來永遠の快樂を恣にするを得べき、西方極樂淨土或は天國と名づくる特殊の場所の住民たる事なりとせり、然れども吾人は成るべく正義公道を學び、之れに適ふ生涯を現世に遂ぐるを以て人間終局の目的とす、何となれば正義に適ふ生涯は單に現世に於て適當なるのみならず、何時何處

に在ても亦人生に至當なる生活の道たりとの推測は、大に吾人の推理心を満足せしむるを得可ければなり。

靈魂不滅

問 人は自覺的又意識的動物として、如何なる領内に屬すべきものなりや。
答 人は不可見的なる思想界、即ち靈界に屬すべき者なり。

問 外界即ち可見的物質界と、不可見的思想界との關係は如何なるものなりや。
答 外界の事物は盡く思想界即ち不可見の力の具體的に現象するものにして、其關係は原因の結果に於ける、音響の樂器に於けるが如

し。

問 人類は如何なる點に於て神の子女と稱す可きや。

答 神は無始無終の神靈にして、人は天より能く此の靈性を稟くる者なるを以て、人類は神の同族即ち其の子女なりと云ふを得べし。

問 外界の事物は盡くる時ありや。

答 勢力と物質とは、何れも無始無終なる神の現象なれば、神と共に永久なるものなり。

問 宇宙間生命となりて現象するものゝ活動の傾向は何れの方面に向ひつゝありや。

答 生命活動の方向は、最も高尚なる生長發展に在り。

問 斯の如き成長は、如何なる道によりて發達するものなりや。

答 可見的外界の事物より不可見なる思想界の方向に向ひ、益々純良

益々靈妙に向上するものなり。

問 人間社會に立て最も高等なる發達の模範は如何なるものなりや。

答 耶穌基督の如き釋尊の如き孔子の如き大賢索克拉底の如き純

良なる心靈的生涯は、最も高等なる模範とするに足れり。此れ等の人々は皆な神の子女たるに適ふ善良なる生涯を遂げし者にして、如此生涯を以て吾人は天國の生活と云ふ、而して此の生命は時と處と其の四圍の境遇に關るものに非ず、是れ即ち宇宙本來の傾向に適合するものなるを以て、又之れを普遍なる生命、無究の生命とも云ふを得べし。

問 吾人の安心即ち最も幸福なる自覺心は如何なる際に於て發動するものなりや。

答 吾人の生命は神の無究なる生氣と永遠に相調和融合するものな

りと自覺せし場合に於て始めて安心即ち最大の幸福を感じ得るものなり。

問 人は如此最大なる幸福即ち安心を得たる際に於ても猶ほ肉體の疾苦或は死亡を恐怖するものなりや。

答 否な斯る場合に於て人の心靈は肉體上の疾苦或は死亡を征服し、既に此れ等の事物より超越せしものにして彼の古來正義を把持して動かず身命を火中に投ぜらるゝも泰然として恐るゝ事なく死を見る事恰も歸するが如き者の存生せし事實は過去の歴史已てに吾人に立證せり彼の索克、拉底が冤罪の爲めに死刑の宣告を受けしを聞き其の門人は金を賂して彼れの罪を購はんとせし時、索氏斷乎として之れを退けて曰く「我れ罪なくして死に定めらる故に金を以て償ふ可きを罪なきと如何せん」と後ち刑の執行の

日に當り平然として不法なる法官の與ふる酒杯を舉げ安然眠ぬるが如くにして未來の國に誕生せしは實に死を征服併呑せし行爲と云ふを得べし、斯る生命を以て吾人は眞に不死、無死の生命と稱するを得べし。

問 之れに反して人の生命は現在に於ても不可見的にして幽靈の如きものなれば其の終局は全く虛無滅亡に歸するものなりとの想像は果して道理あるものなりや。

答 否な吾輩は之れを以て合理的想像と云ふを得ず何となれば此の宇宙間に顯現する勢力は譬ひ一つの細微分子の間に於けるものと雖も一として虚無に消散し終るものに非ず況や人の心靈は宇宙の現象中其の最高等なるものたるに於てをや加ふるに其最も劣等なるものと雖も順次普高等なるものゝ方向に昇進しつゝある

事實は此の美妙なる天地運行の結果にして、此れ皆盡く否な一毫と雖も皆空に終るべしと相像するは、殆んど背理の頂點と云はざる可からず。

問 然らば如何なる解釋を思想界及び秩序的の世界に向て附するは合理的なりや。

答 之れを解釋するに積極的即ち生命を以て解釋するを必要とし、反て消極的即ち死滅を以て解釋するは、吾人が宇宙なる命題に向て與ふる答案に非ざるべし。

問 現世に於て其の最も高尚なる生命の冀望を達せんとせば、如何なる行爲を以て必要とするや。

答 吾人は現世に於て心靈の健全を保たんが爲め、茲に唯一屈強の要素あり、是れ即ち利己心に代ふるに利他心即ち他愛心を養成する

に在り。

問 若し靈魂不滅の冀望は吾人今日の狀態に於て之れを實現する能はざるものとせば、靈魂滅亡を立證すべき合理的論證ありや。

答 否な、之れあるなし、抑も靈魂不滅の道理を人間目下の智識の程度に於て之れを實現する能はざると同時に、靈魂滅亡の論證も亦之れを證明する能はざるなり、蓋し此れ等は實に未來の事物に關する問題にして、何人と雖も明らかに論理的立證を擧示するに難かるべし、然るに此の宏大なる靈魂不滅の冀望は、反て能く神聖なる宇宙の概念と一致契合するものなれば、比較的靈魂不滅の論證は確實なりと云ふを得べし。

福音

問 人心の根底に於て、常に叫ぶ處の願望は如何なるものなりや。

答 人は此の天地間森羅萬象の由來根原を温ね、之れを支配する力即ち神は如何なる目的を以て人類をして此の地上に生存せしむるものなりや、或は神は果して人類を愛撫する者なりや、或は人間の如何なる行爲は神の鴻恩に報ゆるに足る可きや、或は此の人間社會終局の目的は、果して如何なるものなりやとの諸問題に向て確乎たる答案、即ち確固たる智識を得以て安心せん事を冀望する者なり。

問 何を以て人は此れ等の智識を得ざれば安心する事能はざるや。

答 人若し此れ等の智識を得れば、之れに適應する自己の行動を勵み、以て天意に従順ならん事を企望す、如何となれば吾人は天意に順へば榮へ、之れに逆けば滅亡するものなりと自覺するを以てなり、故に人の天則と其の目的を知らん事を企望するは自ら護るの精神より出でしものにして、蓋し或る意味に於て苦を去り樂を需むる人心自然の傾向なり。

問 如何なる方法によりて、此れ等の智識を得べきものなりや。

答 吾人は思想、即ち推理心に訴へて此れ等の事物を知悉せんと欲す、而して吾人の推理心は終に此の宇宙の大目的が正善にして、神は即ち慈愛の神なるを知る、故に吾人の行爲は正善慈愛に適合すべきものたらざる可からず、隨て萬有は盡く不完全より完全、即ち劣等の善より高等の善に進歩すべきものたるを知れり。

問 善と惡とは何れか優勝者なりや。

答 吾人注意して世間の實相を看來れば、惡は常に最後の勝を善に譲りつゝあるの事實を看破するを得べし、故に善は又其の反對なる惡をも化して能く利用する優勝力を有するものたるを知るに難からざるべし。

問 善の惡に勝ちし著名の事實ありや。

答 善の終に惡を征服せし例證は古來一々枚舉するに遑まあらざるべし、彼の四聖人の傳記を見るも其他忠臣義士の性行中實に顯然として此の事實を證明せるは何人と雖も既に熟知せるものなるべし。

問 福音とは如何なるものを云ふや。

答 福音とは、即ち此の世界にて善は必ず惡に對して優に勝ち得可きものたるを保證せる實例を訓示するものにして、未熟の

人を獎勵して成熟醒覺の機會を與ふるのみならず、醒覺者をして益々完全ならしむるものにして、是れ恰も滋養食物或は強壯劑の如し、飢餓の人は之れに依りて健康を回復し、健康者は之れを用ひて益々其の氣力を旺盛ならしむるを得べし。

問 如何なる福音は人間社會に最も有力なるものなりや。

答 吾人茲に新たなる福音即ち天則を宣言す、即ち「萬民は盡く神の愛兒たる事」隨て一家一族、鄉黨朋友より各國民の協和一致は此の人間社會に安寧幸福を増進する最上方法たりと教訓する者は眞の天使にして眞の福音を傳ふるものたるなり。

問 斯る幸福なる社會觀は人生に如何なる裨益を與ふるものなりや。

答 斯の如き社會觀は吾人の心靈に眞誠確固なる安心、満足、歡喜及び高尚なる冀望、愉快なる樂天主義を與ふるものにして、現今人心の

傾向は益々此の社會觀に向て流注しつゝあるを見るべし、世の所謂不平、怨恨、厭世は無爲怠惰より生じ世を詛ひ、人を詛ひ、又己れを詛ふのみにして人世を濟ふものに非ず、之れに反して安心、満足、歡樂觀は勤勉努力より來り又勤勉努力を獎勵して世を救ふものなり。

○道 德

道德に就て

問 人の高尚なる能力とは如何なるものなりや。

答 人の高尚なる能力とは善惡を識別するの力を云ふ。

問 人の高尚なる徳性とは如何なるものなりや。

答 人は惡を忌み、善を愛するの特性あり、之れに依りて人は高尚なる

被造物、即ち萬物の靈長たるを得べし。

問 悪人は善を愛するものなりや。

答 悪人と雖も亦必ずしも之れを尊敬せざるには非ざるべし、然れども其の惡者たる由縁は其の智慮高尚ならざるが爲め時としては取捨選擇を誤り、又時としては目前自己の利益、強て之れを云へば消極的善を取り、反て遠大の積極的善を失ふものと云ふべし。

問 倫理學とは如何なるものなりや。

答 倫理學とは人の徳性に關する學問にして、人間の意思自由の能力の範圍内に於て善惡に關する諸法則の關係を正當に規定し、詳細に解釋するの學問なり、換言せば人と人との間に起れる道德的關係を正當に規定解釋する處の學問なり。

問 人の徳性は何處より來りしものなりや。

答 或る論者は人の徳性を以て單純なる感覺及び劣等なる實利の慾情より自然に淘汰せられて發生せしものゝ如く論ぜりと雖も吾人は之れを以て人間固有の道德原子より發生せるものなりとし、決して純然たる不道德即ち私慾的感覺より發生せりと爲す能はざるなり、蓋し人類の道德的概念は其本源に於て確乎たる潛勢力なくんばある可からず、彼の進化説を以て之れを論ずるも道德の萌芽は(成果には非ず)少くも先天的に存在せるものならざる可からず、何となれば人類の道德心にして自然淘汰により善を選択保存したること諸他の能力の如くならしむるものとせば、必然的に善なるものは其の選擇以前に於て業に既に成立したりしものならずんば自然淘汰を適用すべき主物なきを如何せん況や造化は如何に巧妙なるも無より有を作爲し、或は進化せしむるを得べし

問 とは進化論者と雖も許諾する能はざるものたるに於ておや、何故に正義眞實の言行は不正虚偽の言行よりも名譽なりや、

答 人若し正義を行ひ眞實を語りて他人より義とせられず、又信ぜられざるも、意中自ら欣々の情止み難し、然れども不正を行ひ、虚偽を以て人を瞞着し人の知らずして己れを義とし、或は信ずるも自ら其の不正不義たることを知覺するものなるが故に、意中反て快々慚愧の情に耐へざるべし、惟ふに自己の道德的本質が明暗に論なく、自己を照鑑し、他人に先つて自己の言行に對し、既に賞罰を加ふるものなるに依れり、

問 如何なる行爲を以て高尚なる品行即ち徳行と爲すを得べきや、
答 高尚なる品行とは如何なる場合と雖も良心の選定せる目的に對して善意愛心の智識的應用を云ふ故に、同一の愛心にして甲の場

問 合に在ては勇氣を意味し、この場合には謙遜を意味するもの也。
 遇然の出来事の爲めに起れる行爲は善惡を以て論じ得べきものなりや。

答 人の行爲にして眞に其の意思より發せざる時は道德上善惡の標準を以て律すべからず、何となれば是れ過失にして德行或は罪惡に非ず、夫れ德行とは其の結果の善惡に論なく、其の人の正當なる目的を以て、正當なる方法の應用上加ふる名稱なり、醫へば茲に富者ありて其の別荘を建築せんが爲めに、或る山水眺望の好き地を高價にて買入れたり、然るに遇然にも此の地は或る貧民の所有地たりしを以て、之れが爲め貧民の愁眉を開かしめたりとせんか、如此場合に於て貧民を賑かしたるは、彼の慈善家が少許の資を育兒院又は盲啞院に喜捨せると同一の贊詞を加ふ可からざるや、明らかなり。

問 高尚なる道德的關係は快不快の念慮より起る可きものなりや。
 答 吾人は快不快の念慮より起る處の行爲を以つて正當なる道德的行爲となすを得ず、彼の犬を愛する主人は其の飼犬を飼養するに丁寧親切を以てし、或は肉片菓子等を與へて種々なる技藝を教へたる場合に於て、犬は能く主人の命に従ひ、種々なる技藝を演じ、以て主人の勞に酬ゆべし、然れども犬に於ては單に快不快と恐懼の念慮に束縛せられて演藝するものなれば、茲には意思の自由なく、只だ犬の生理的饑餓の力を利用し、恐怖と慾望とに依りて其の行爲を變ぜしめたるに過ぎざれば、以て正當なる犬の德行と云ふを得ず、故に人間社會の制裁又は法律あるが爲めに惡事を爲ざる者は以て道德家と云ふを得ざるや、明らかなり。

問 何を以て恐怖心、不快心より發する行爲を徳行とする能はざるや。

答 何となれば是れ即ち利害の舞臺にして義務の舞臺に非ず、而して義務の概念は即ち個人と個人との間に起れる處の關係にして、此の概念は道德の本質なるを以て之れを缺く時は道德の成立し得可きものに非ず、抑も個人と個人との關係とは外形の行爲のみに非ずして内界の思想、或は感情の相伴ふものたるを要す、換言せば善惡選擇の自由を有する心靈と心靈との關係なり、故に恐怖心、不快の念は動物的或は奴隸的服従の念と同一にして選擇の自由茲に存せず、單に機械的盲動にして、斯る盲動は決して道德法の下にある可きものに非ず、自然法の下にある可きは當然なり、思ふに斯くあらざる可からず」と『斯くあり』との學問の區別なれば、全然道

徳論と其の範圍を異にせるものたるや明らかなり。

問 人其の徳行を修めんとするには如何なる方法に據るべきものなりや。

答 徳行を修養せんとする者は先づ良心の選擇せる方向に向て進むべき良習慣を養ふに在り、蓋し良心の選擇は決して自己の利、不利を論ぜざるものにして、隨て其の選擇は常に正當なり、或は又古書を讀て古人を友とし、良友を得て斷琴の交を結ぶが如きは徳行修養の捷徑たるべし。

問 徳行の源泉は如何なるものなりや。

答 徳行は正善、即ち愛心より發源するものなるを以て、徳行ある人は決して其の隣人を妨害せず、又虚偽の言行なく、常に天下の公益を圖り、人を愛する己れを愛するが如くするを云ふ。

問 愛心ある者は既に正當なる徳行を成就し得るものなりや。

答 愛心は即ち徳行の根元たるも、之れを耕すに智識を以てせざれば、其の目的の正當なるに係らず、時として過失に陥る事少なしとせず。

問 然らば徳行の根元は實に薄弱なるものにして、徳行必らずしも善良の結果を生ぜずとせば、徳行は實に危険なるものに非ざるや。

答 道德學は即ち結果の學問に非ずして、意思と之れに伴ふ行爲の學問なり、故に不幸にして其の結果の善良ならざる事ありとするも亦敢て咎むべきものに非ざるべし、譬へば茲に貧究なる少女あり、彼れは病に罹れる母を介抱するに、其の家の貧なるが爲め、小女は自ら己れの飲食を忘れ、二六時中殆んど勞働と母の看護とに費したるも、不幸にして母が治癒の効を奏せざるのみならず、自らも亦

疲勞と衰弱の爲めに死せり、又或る人は其の親の病を癒さんが爲め、所謂貧究の盜をなしたる者なりしが、幸にして其の目的とせる親の病は癒ゆるを得たり、扱て右の兩者は何れも其の目的に於ては等しく父母の疾病を醫するに在りて、甲は其目的を達するを得ずして倒れ、乙は之れを達したり、然れども其の選びし處の方法は甲に在ては自ら節制し終に死に至るも、素行を變せずと雖も、乙に在ては不正の盜賊なり、斯の如き場合に於て此の乙者を認めて公明正大なる徳行とする者なきのみならず、誰れか結果不幸の甲女の爲めに同情一掬の涙なきを得んや、要するに其の結果如何に關らず、甲女の行爲は即ち徳行の標準に合ふが爲めならずして何ぞや、故に道德學は結果を論ずるものに非ずして、其の意思と方法とを論ずるものなるを知るに難からず、蓋し正當なる道德上の判斷

は人を判断するの謂にして行爲の結果を判断するに非ず、隨て其の行爲の結果は人に快樂を與ふると、苦痛を與ふるとに關せざるものたるを知るべきなり。

問 人の良心、即ち純潔なる心靈は快不快の念慮に抑制せらるゝものなりや。

答 人の良心は決して快不快或は毀譽褒貶に遁著なく自己の選擇せる一方向に直進し、反て通例人の不快と感ずる事物を以て快樂となせるが如き觀なしとせず、現に「有名なる實利論者」ジョン・ステュアート・ミル氏が「今若し余をして自ら善人と認めざる某人を強て善人なりと呼ばしめんとし、若し然らざれば、爾を驅て未來永劫の地獄に墮落せしむ可し」と云ふ者ありとせば、余は斯の如き人々の所謂天國に昇らんよりは、反て地獄に墮落するを擇ぶべし」と云ひ、又教授ハックスレー氏も快樂説を主張するに關らず、今假りに神學は邪惡なる神の存在を立證し、隨て社會の宗教的信仰は道德上の理想を捨て、斯る邪惡なる神を取らんか、余は斷じて之れに與せざるのみならず、人類が邪惡を崇拜し、邪惡よ汝は我が神たれ、とて之れを信仰し、以て人類の永生を貪らんより、余は寧ろ人類と共に斯る邪神の爲めに盡く勦滅せらるゝを以て遙かに勝れりと思惟すと云へり』(Bixby's Crisis of Morals) 蓋し人の正義に忠實なるは僅かに快不快或は世間の毀譽褒貶に比すべきものに非ず、人類の全滅を賭するも猶ほ正義に忠實なる心靈の號叫をば斯くの如く實利主義の人々の口より漏洩せしめたるものに非ずして何ぞや、故に道德的理想なるものは實に神聖不可侵の心靈の號叫にして、明らかに利不利或は苦樂の計算以上に超然たる

や智者を俟たずして既に明白なり。

問

徳行は如何なる方法に依りて學ぶを得可きや。

答

徳行を修むるに最も適當最も簡便なる方法は古今東西に其の名を知られ、恰も芙蓉峰頭の俗塵を脱して四時秀麗なるが如き有徳圓滿なる人々の性行に鑑み、之れが感化を受くるに在り、何となれば斯る行爲は高尚優美にして人間社會の欣慕すべき最上の感化力なればなり、換言せば是れ所謂神の聖き性質が人間の性狀に反映するものなればなり。

良心

問

良心とは如何なるものなりや。

答

客觀的に之れを見れば吾人々類をして正義を行はしめんが爲め常に吾人を諫争する處の一勢力なり、故に信仰上の詞を以て之れを云へば、即ち上帝の人類に賜はれる神勅にして是れ恰も外界の物質界に行はるゝ引力の如く、人の内界に行はるゝ一種の厥力たり、然れども主觀的に之れを見れば即ち人性固有の道義心にして、左に四種の定義を列擧し、以て良心の意義を理解するの便に供せん。

- 一 道德心、換言せば嚴肅なる善惡を區別する知感及び高尚なる精神的動念と、賤劣なる禽獸的動念との嚴肅なる區別の知感
- 二 正善を行ひ邪惡を避け、劣等なる動念を去て高等なる動念を取るは、人たる者の義務なりとの感情
- 三 吾人の意識は反省によりて高等及び劣等の動念中、其の何れ

を嘉賞すべきやを比較し、從て孰れを高等となし、孰れを劣等となし、將た其の孰れを採擇すべきやを觀察す、其の選擇は果して道德的智識に背かざるや否や、其の選擇の結果たる行爲は道德的理想に一致すべきや否やを了知する所の心證若しくは自認の活動力。

四 行爲の判定者、即ち道德的認識の嘉賞する處となり、又道德的意思の決行せんとする處を外部に表現すべき適當の行爲を吾人に指定する處の判斷力即ち是れなり。(Crisis of morals)

問 人若し惡事を行ひし時に際し、意中自ら安からざるは果して如何なる所以なりや。

答 斯る場合に於て人は神の聖旨に逆ひ、内界の厭力に抵抗し、自ら精神界の法則外に逸脱せるを以てなり、是れ即ち廉耻の感覺にして

恰も衆人の面前に於て其の衣類を剝脱せられたると同種類の感

起すものたるなり。
問 人は常に良心の平和を得んとするには如何にせば可なるものなりや。

答 良心の不安にして平靜ならざるは即ち其の軌道を脱奔せるを自證するものたるを以て、直ちに普遍的善意即ち上帝の聖旨の範圍内に歸るべし、斯くの如くする時は直ちに良心の平和を回復し得可きものにして、人は常に此の範圍内に良心を安置する事を勉むべし、惟ふに孟軻氏の放心を求むるの謂ならんか。

問 時代により正義の觀念に差異なきものなりや。
答 人は經驗を積み、漸次智識の容量を増加するに從ひ、正義の觀念も逐次高等に進化するものにして、人の良心も亦常に吾人を驅て

尙ほ高等なる正義の道に昇進せしむるものなり、故に今日の人間は往古ダビデ王或はユリセスの時代に於て想像せし正義よりも遙かに高尚なる正義を要求する者たるは論を俟たざるなり。

問 良心の發動は時と人との依りて一定せざるが如き觀あるは、果して如何なる理由ぞ。

答 人の良心は時により、又人に依りて普遍的善意(上帝の聖旨)の脈力を感ずる程度に差異あるは、恰も磁石針が其の位置の異なると感動力の強弱とに依りて、地心磁力の感應を受くるの程度に所謂磁針の變差を生じ、或は感動の鋭鈍を生ずるが如し、故に人も亦其の周圍の境遇の差異によりて得たる智識の程度の差異に依り、良心の感動に利鈍あるは至當なる事實たり。

問 何をか健全なる良心と云ふや。

答 心靈の善良なる感覺を健全なる良心と云ふ。

問 何をか病的の良心と云ふや。

答 正義を遂行せんとする冀望よりも、單に悪行を恐れ避くるの情切なるが如きものを病的の良心と云ふ、是れ必竟卑屈なる自愛心にして、寧ろ利己心と云ふを以て適當とせん、故に人は惡を爲さざりしのみ依りて善人たりと云ふを得ず、必らずしも惡を畏怖するなく、進んで善を遂行せんとするの冀望ありて後ち始めて健全なる良心たるを得べし。

問 何をか偉大なる良心と云ふや。

答 神の聖旨の協力者となり、宇宙に最大善意の成果を擧げんが爲め、自己の意思を以て神前に供奉するを至樂とする處の人の良心を、吾人は偉大なる良心と云ふ、何となれば斯の良心に非されば以て

神勅たるの効用と威嚴とを缺乏し、隨て偉大なる徳を此の世に成就する能はざるを以てなり。

義務

問 何をか義務と云ふや。

答 義務とは、各人の必らず正當に負擔す可き責任にして、其の何人たるを論ぜず、總べて自己の權利を保全せんと欲せば必然的に義務の觀念に到達するものなり。

問 義務の觀念は何處より來れるものなりや。

答 義務の觀念は即ち人間の自衛的本能、即ち權利の感覺と相俟て發するものにして、彼の直線は必らず其の兩端を有するの必要ある

が如く、權利の存在は論理上義務の存在を認定し、始めて全きものたるを得べし、何となれば人にして自己に權利あるを知らば須ら

る自己の爲めに此の權利を保存すべき義務あり、隨て他人をして自己の權利を尊敬せしめ、自らも亦他人の權利を侵害せざるの義

務双方の間に生ずべし、換言せば己れの權利を主張せんとせば、他人の權利に對する相當の義務も亦必然の結果として是認せざる

所からざるものなるが故に、義務の觀念とは、人を自衛の本能を擴張せられたる結果なりと知るべし。

問 何をか權利と云ふや。

答 自然界の事物は暫く措て問はざるも、人間社會に於て之れを云へば、自己の概念の發すると同時に自己の存在權を有して此の世界に存在するものたるを認識し、隨て自ら衛りて其永續を保護す可

き權利を有す、是れ單に人間社會のみに於て認めらるゝものに非ずして一般の動物界に在ても明らかに其の權利認識の徽章を發見するに難からず、鳥類が其の巢の所有權を争ひ、犬豚が己れの食器中の食餌をば他の鳥獸にして之れを奪はんとせば、決死の争闘を以て之れを守らんとするが如きは、即人間社會に所謂財産所有權を争ふものにして、惟ふに財産なるものは人間に在ては勿論、就中下等動物の食餌の如きは、直接に自己の存在を永續するに當りて其の最も必要物件たればなり。

問

義務を盡すとは如何なるものなりや。

答

義務を盡すとは人の認めて以て正當なりと認め、爲さざる可からずとする處を利害に論なく決行するを云ふ。

問

正當なる事物とは如何なるものなりや。

答

正當なる事物とは正義に適合する事物にして、心靈の認めて以て正理公道なりとする事物を云ふ。

問

人の正當なりとするものは常に不變にして同一なるものなりや。

答

正義の概念は即ち人間の眞善美の觀念を總合せる抽象的概念なり、此の概念を世の實際の事物の上に應用せる斷案は時と場合に於て甚だしき差異を生ずるものにして、宗教上の事物に就て一例を擧ぐれば、現に羅馬教會に於ては教會の意見を以て宗教的事物一切の標準とし、反抗者(新教徒)は其の名の如く全く此の定義に反抗し、聖書を以て信仰の標準とし、唯一教徒の如きは反て各個人の理性の斷案を以て各個人の信仰の標準とするか如し、蓋し人間社會の事情は極めて複雑なるものにして、人々周圍の境遇と教育の方法と、文化の程度、祖宗の遺風等の差異によりて、如此正當とする

問 事物の認定法に相違を生ずべきものたるべし。然らば此の複雑なる人間社會に於て、眞に正當と認むるものを確定す可からざるや。

答 吾人ほ必ずしも之れを確定するに難からざるべしと信ず、何となれば羅馬教會に於て教會の意見を以て宗教的信仰の標準と定め、反抗者新教徒間に於て聖書、或は各種の信仰箇條を以て標準と定めたるは、必竟各々自ら正當なりと認定せるものを以て標準とせるに外ならず、現に教會の意見にあれば、聖書にあれば、信仰箇條にあれば、其の當時之れを選定せし人々の良心は、是れ確かに正當なる標準なりとて認定せり、故に今日に至るも猶ほ或る社會に於て一種の標準として之れを繼續す、要するに古人は其の當時各個人の理性の斷案を以て信仰の標準と定めたるものにして、今人も亦古人

問 權利を以て神は古人にのみ私するものなりとするを得ざるなり。然らば如何なるものを以て、人々の義務として當に盡さる可からざるものとするや。

答 吾人の良心は人類一般の安寧幸福の量を増進するを以て各個人の正當なる任務なりとす、故に只だ自己のみを益するも、害を他人に及ぼすの恐れあるものは以て正當なる任務と云ふを得ざるべし、故に彼の罪惡邪行の如きは人類一般の安寧と幸福の量を減ずるものたるを以て全然之れを不正不義として排斥せざるを得ざるなり。

問 正義は常に同一なりや。
答 正義其のものは固より抽象的の概念にして終始變化すべきもの

に非ずと雖も、之れを實際の事物の上に適用して事物の正邪を判別するに當り、人智の高低により、往々世間に正邪顛倒の誤謬なしとせず、惟ふに同一の事物にして時として正たるが如く、時としては又邪たるが如き場合少しとせず、要するに其の關係者に甲乙あるが爲め正邪を顛倒せざる可からざるが如き事實あるを以て、實際の應用上に在ては事々物々に觸れて理性と良心の訓練を仰がざる可からず、然りと雖も又茲に最も困難なるは世界の事物は單に自己又は人間の爲めのみ成れるものに非ざれば或る場合に於て有限の人智は此の無限の事物を盡く正邪の下に判別す可からざるや知る可きなり。

問 人は何によりて實際事物の正邪を判別するものなりや。

答 人の正邪を實際上に於て區別するは、即ち其の經驗に依り理性の

斷案を俟つものにして、恰も人が滋養物と毒藥とを區別するが如し。

問 正義は宗教的に之れを何と名づく可きや。

答 正義とは神の聖旨にして永遠無究なり、又正義に服従するは人生の常則に服するものにして、人若し之れに逆へば倒れ、之れに従へば興る可きものなり。

問 吾人は他人に對し正義を行はざる可からざる任務ありや。

答 吾人は他人に對して正義を行ふ可き義務を有す、何となれば、吾人は他人を苦しむるの權利を有せざるが故なり。

問 吾人は自己に對して正義を行はざる可からざるの任務ありや。

答 然り、何となれば人若し不正を行ひ、之れが爲め幸にして他人を害する能はざりしとするも、亦必らず自己の人格を害する大なるを

恐るればなり。

惡の說

問 人は如何なる事物の上に惡なる名稱を加ふるものなりや。
答 惡とは簡短に云へば、大凡吾人々類生活の安寧幸福を阻害する處の事物の上に加へたる名詞にして、時としては或る有益なる事物と雖も、未だ人に依りて其の効用を發見せられざる場合に於ては、又之れを惡と呼びなせり。

問 古來惡なる者の普通一般の解釋如何。

答 古來泰西諸國に於て、惡事の世に存在するは必ず惡魔なる者の存在に歸し、此の者は神怒の下に未來永劫の罪科を擔ひ、人間界に出

沒し、以て人を邪惡に誘惑する者なりとせり。

問 古來人間の惡なりとせしものゝ上に於ける新思想は如何。

答 吾人は今や颶風電雷等の用と原因とを多少理解し、更らに進んで噴火山地震等は此の地球の製作上必要なる一事實なるの理を窺ひ知るを得しを以て、如此古人が大惡魔の作用なりと誤認せし事物と雖も、已に惡魔の作用に非ずして此の神聖なる宇宙を開導する神意の發現に外ならずとし、隨て此の神聖なる宇宙間最早惡魔の存在すべき餘地なきに至れり。

問 何故に吾人の思想中此の宇宙間已てに眞の惡魔の存在を認むる可からざるや。

答 如何となれば惡とは有害無益なるもの、惡意なるもの、隨て不整頓にして秩序なきもの、混雜紛亂せる者の謂にして、如何て此の神聖

なる善意の宇宙、秩序的、世界、美と仁との天地間に於て、斯る悪魔の存在をば人間思想界の法則として認定するを得べけんや。

問 然らば、所謂悪なるものは、果して如何なるものなりや。

答 悪とは單に比較的即ち物と物と相對の上に名づけたる假稱にして彼の庭園に生ずる雑草の如きも決して悪しきものに非ず、反て天然に美の眞境を寫せるものたりと雖も、只だ吾人の庭園に於て他の雑草の繁茂を欲せざるにより、吁！あしき雑草よ！と感ずるに過ぎず、然らば雑草の悪しと云ふは、只だ庭園との關係上悪しきものにして、雑草天然の性狀より論ずれば、敢て悪ならざるのみならず、此の雑草は野外の山水を彩色する、最美、最妙なる善きものたるを知るべきなり。

問 苦痛の如きものと雖も悪ならずとし得べき論證ありや。

答 然り、饑餓は人の最も感ずる苦痛の一なるべし、然れども是れ決して悪ならず、何となれば、饑餓は人の貴重なる生命を緊ぐべき最緊要事件なればなり、不安心と危険とは人の苦痛とする處なり、然れども是れ人を驅つて家屋を造作し、家業を勵み、文明開化に進ましむるの要具たるを忘る可からず、疼痛の如きに至つては確かに人生の警鐘と謂つ可きものなり。

問 人若し全く苦痛、困難を知らざる者なれば、茲に快樂の何物たるを理解し之れを行ひ、樂む事を得可きや。

答 人の苦痛を感ずるは、是れ生々活潑なるの證にして、苦痛を感ぜざるものは死塊に等し、況んや人の智識は比較的に得可きものにして、苦痛なき世界には快樂の何たるを解するの道なかるべし、吾人は反て苦痛を以て進歩の良教師とす、蓋し苦痛の何たるを理解せ

問 答

ば、苦痛何ぞ厭ふ可きものなるんや、
 死は果して悪ならざるや。
 若し前陳の如く此の宇宙は眞に善意の宇宙なれば、死何ぞ悪たる
 を得んや、是れ必ず人生進歩の一段落に過ぎざるべし、死は決して
 人事の終局に非ず、是れ只た物質的進化の経路に過ぎざるなり、善
 人何ぞ肉體の死の爲めに其生命を害せられんや、肉體の死は永生
 に至るの第二の門戸なり、死は恰も安眠の如く、肉體の疲勞せし時
 に於て發る肉體上の一現象なり、故に人は寢るも其生命は滅ぶる
 ものに非ず、夫れ死とは肉體上の變化なり、肉體上の生活とは新陳
 代謝を云ふ、換言せば生活せる肉體は毎日其の舊分子をして死滅
 し去らしめ、食物呼吸等によりて外界より得たる新分子と相交替
 す、肉體の此の作用を中止するを死と名く、然らば死とは全然物質

界の状態にして、精神界即ち心靈界の状態に非るべし、故に人と云
 へる名詞は此の物質なる肉體の上に名けられたる名稱なりとせ
 ば、死は人間の最終局たるが如しと雖も、猶ほ更らに進んで之れを
 考察せば、新陳代謝の作用を中止せし物質は是れと同時に他の方
 面に向て其の勢力を逞ふするを見るべし、是れ腐敗なり、分解作用
 なり、此の作用に依りて物質は本來の位置に復歸し、再び他の縁に
 觸るゝを俟たん、然らば肉體なる物質は人の形體の上に死せりと
 するも、物質の力は決して是れと同時に死滅するものに非ざるべ
 し、況や人の人たる本質、其の思想、其の靈魂は之れと共に消長する
 ものに非ざるに於てをや、故に死は人の人たる本質に向て何等の
 損害を與ふるものに非ざれば、吾人は之れを以て惡事なり、凶事な
 りと擯斥すべきものに非ざるを知る。

問 人は何故に生活を企望するや。

答 人は此の世の生活によりて神の聖旨に奉仕し、或は其の善意を發現せんと欲するを以てなり。

問 然らば死は其の企望に反するものなりや。

答 吾人は生死に論なく、萬有は盡く神の聖旨即ち善意に奉仕せざる可からずと信ずるが故に、人は死するも猶ほ神の聖旨の下に在て奉仕す可きものなりとす。

問 死の恐怖を越へて、如何に高尚なる企望は善人の眼中に在りや。

答 善は宇宙間の最大最高權威なり、故に善人は此の最高權威を掌握するを以て所謂天下に敵なきの人なり、曷ぞ肉の死亡を恐怖せん吾人は反て次に來らんとする世に在て大に其の壯圖を成就せんとするの大企望を有す。

問 人は何故此の世界に在て苦痛なくして安樂を得、價なくして快樂を得、死なくして生を得る能はざるや。

答 人は世界の一員として、又人として此の世界に存在する限りは、此の世界の大法に従順なるべき義務を有す、是れ人の人たり世界の一員たるの權利と相伴ふものなり、此の世界は成長すべき世界なるを以て人も其の一員として成長せざる可からず、故に人は新たなる世界、新たなる人間の狀態に應じて、間斷なく、新陳代謝の作用を賛翼せざる可からず、是れ吾人に苦痛と死の價を要求する所以なり。

問 然らば成長と苦痛は離る可からざるものなりや。

答 然り、苦痛不満足は快樂満足なる成長に缺く可からざる必然的要素にして、人は之れに依て、其の成長力を興奮せしむるを得べきも

のなり。

問 所謂悪とは簡短に之れを譬ふれば如何なるものなりや

答 悪とは或る文章中に在る處の章句訓點標記の如きものなり若し其の文章中更らに章句訓點標記なかりせば只だ文字を多く集積せしのみにして直ちに其の意を解する事はざるべし然れども斯の如き標記あるによりて一目了然たる明文となり合理的文章となるものなり然り而して此の標記は決して文章にも非ず意味にし非ず只だ文章をして明了たらしむるの具たるに過ぎざるなり死苦の如きも亦然り只だ人生なる大文章の上に一種の訓點標記として見る可きものなるが故に吾人は又之れに依りて人生の上に一層の妙味を理解するを得るものなり

問 然らば人生の法則とは如何なるものなりや

答 是れ恰も音律法の緩急高低休止等に依りて美妙の音調を作すが如く人生に於ても光明と暗黒饑餓と満足労働と休息苦痛と快樂悲哀と仁愛等の綜錯して以て美妙の人生を形成せり

問 神は人類の心靈に對て如何なる訓令を與ふるものなりや

答 曰く 成長すべし ー とは神の人類に下せる訓令なり故に決して休止すべからざるものなり

問 勤勞と困苦に向て人は如何に考ふ可きものなりや

答 人の高尚なる心靈は神の子として斯る勞苦を恐れずして奮闘するに在り

問 最大最幸なる生涯を遂げたる者とは果して如何なる者なりや

答 其の人の生涯に遭遇する處の勤勞辛酸に對抗し死に至るも之れに屈せざる者の生涯を以て吾人は之れを最大最幸の生涯と云ふ

問 人生の幸福に就て教示せられたる耶蘇の名言は如何。

答 『人若し其の生命を保たんが爲めに勉むる者は之れを失ふべし故に人は其の生命を正義の爲めに失ふ者は之れを得べし』と云へり。是れ人は決して其の勞苦より逃れんと試む可からず何時も其の義務と仁愛の召に應じて快く其の身命を捧げざる可からざるを訓示せり。

問 苦痛辛酸と快樂とは兩立し得可きものなりや。

答 然り、古來の聖賢の士は其の生涯に於て之れを證せり、譬へば耶蘇の生涯ソクラテスの生涯等の如き即ち是れなり。

罪 惡

問 正義の行爲とは如何なるものなりや。

答 正義の行爲とは、世界に於ける善の分量を増進せんが爲めに盡す處の行爲を云ふ。

問 人若し惡事を行ふたる時は、其の人の生涯に如何なる結果と來するものなりや。

答 彼は必然其の生涯を傷け、其の生涯を萎縮せしむるものなり、何となれば、正義の行は此の神聖なる宇宙間に於て人の行ふ可き唯一の道にして、之れに反する行爲は此の宇宙の性質と相容れざるものなるを以てなり。

問 人若し充分事物の道理を知了する時は悪事を行ふ事なきものなりや。

答 否、智識の人と雖も往々悪事を行ふ事あり、然れども若し人にして世上事物の道理をば神の明知し玉ふが如く了解するを得ば其の人は決して悪行の企望を起さざるものなり、必竟悪事を行ふ者の智は未だ以て明智の價なきものなり。

問 何を以て人間は罪惡を行はんとする企望を有するや。

答 人類目下の状態は未丁年の如く往々自己の嗜慾のみに耽るの傾向ある時代なればなり。

問 何をか罪惡と云ふや。

答 罪惡とは虚弱なる思想の一種病的意思の發現なり。

問 何を以て人間成長の發端とするや。

答 人の動物性的性状を脱する時代を以て眞に人間の成長の發端とす。

問 何を以て動物性的性状と云ふや。

答 動物性的性状とは利己心と肉慾とのみに沈淪せる者を云ふ。

問 核提の稚子、或は普通動物の利己的にして肉情にのみ支配せらるるは以て罪惡と爲すを得可きや。

答 否、利己心と肉慾の強盛なるは只だ下級の生活、或は普通動物の性状の一端なり、故に下級の生活者(兒童)普通動物等に在ては之れを以て罪惡と見認むるを得可からず。

問 利己心は如何なる場合に於て罪惡と見認む可きや。

答 人若し利己主義を濫用するは他人に對して不義なりと思意する

を得る場合に於て始めて利己心は罪惡たるに至るべし故に人若し利己心は確かに不義なり、不義は確かに罪惡なりとの事實を智覺するは、其の人の己に數歩高等なる階段に進歩せしものにして彼の虎は利己心の何物たるすら未だ智覺し能はざるを以て、遙かに人間より下層の位置にあるものたるを知るべし。

問 何を以て利己心は罪惡ならざる可からざるや。

答 利己心は只だ己れ一個人の爲めにのみに生活するものなりとして、隨意に自己の欲するが儘にせんとし敢て他人の利害を顧みざるのみならず、之れがため他人の權利を侵害するものなるが故に、任他其の人一個人は假りに幸福なりとするも爲めに他の人々の幸福を傷害する事多ければ、此の宇宙の目的、即ち世界に善の分量を増進するを妨害するものなるを以てなり。

問 道德的成長即ち心靈的發達とは如何なるものなりや。

答 心靈的發達とは利己心を脱却し、愛を以て生命の原則と觀するに至るを云ふ。

問 利己心を蟬脱するを得可きものなりや。

答 然り、之れを蟬脱せんとするは人の高尚なる天性なればなり。

問 各人其の利己心を蟬脱する時は此の社會をして如何なる状態とならしむるを得るや。

答 各人其の利己心を脱却する時は此の社會の全體をして所謂天真爛熳たる健全社會たらしむるを得べし、是れ恰も一個人の身體を組織せる各細胞の健康力は必ず其の全身の健康を産出するものたるが如し。

問 道德上の罪惡なるものは如何。

答 道德上の罪惡は恰も肉體上の疾病の如し、人は疾病に其の身を犯さるゝを知るや、健全なる肉體の生活を遂げんが爲めに勉勵して之れを排除す、斯の如く道德上の罪惡は良心の厭ふ可きものたるを感ずるや、人の良心は道德上健全なる生命を失はざらんが爲め之れを除却せん事を勉むるものなり。

問 罪惡は如何なる處より來るものなりや。

答 罪惡は時として無智より來り、時としては不健康なる情の發動、即ち憤怒、愼患の念慮より來り、時としては一時不義の快樂を食りたる報酬として來るものなり。

問 道德上の罪惡は、如此く厭ふ可きものなるに、何故に罪惡は屢々人間を誘惑するものなりや。

答 是れ必竟人類が無智にして其の罪惡の何物たるを知らざるに依り、之れが誘惑に逢ふものにして、恰も小兒が未だ火の熱きものたるを知らずして一見其の新奇の火色に誘はれて直接に之れを把持し、爲めに火傷を蒙るが如し、然り而して小兒は之れに依りて火の恐る可きを學び、再び其の熱火を直接に把持せざるべし、人間も亦屢々此の如き誘惑に遭遇し、終に罪惡の何物たるを了解し、過を再びせざるに至るものなり。

懲罰

問 天則とは如何なるものなりや。

答 宇宙間に磅礪たる力則ち生命の秩序的現象を以て天則と云ふ。

問 天則なるものは、隨意に變更し、破壊し得可きものなりや。

答 否な、天則は人の決して隨意に變更し、或は之れを破壊し得可きものに非ずと雖も、吾人は一時人の自然に逆きたるが如き場合を以て、天則を破壊せりと見做すに過ぎざるべし、然れども天則は依然として不磨不滅たるや勿論なり。

問 天則の違反者は、實罰を科せらるゝものなりや。

答 然り、天則の違反者は必ず懲罰を蒙るものにして、人若し放恣にして酒色に耽溺する時は直ちに疾病と貧究怠惰悪習と社會の排斥とを蒙るものにして、其の人は自然同胞間の信用を失ひ、廣き世界を狭く渡らざる可からざるに至れるは吾人の日常眼前に目撃する處の事實なり。

問 斯る懲戒の目的は何處に在りや。

答 此の如き罰則は吾人に苦痛を與へ、廉耻の念を興さしめ、終に吾人をして自然の大道に復歸せしむるものたるべし。

問 何をか道德上の罰則と云ふや。

答 道德上の罰則は即ち正義の大道を陥み誤りし者の心靈をして、再び其の大道に歸らしむ可き良心の苦痛にして、是れ即ち正義の正義に對する強盛なる抵抗力なり。

問 此の如き苦痛と抵抗力は如何なる結果を人心に顯はすものなりや。

答 良心の苦痛は常に吾人をして正義を奉ぜしめんが爲めに發する天父の諫言なり。

問 人間社會の刑罰は常に誤謬なきものなりや。

答 否な、人間社會の刑罰は屢々誤謬あるを免かれず、何となれば司刑

者にして屢々己れの憤怒或は社會の一種病的意恩を以て人を處罰する事あるを以てなり。

問 然らば刑罰は如何なる目的を以て施行すべきものなりや。

答 其の刑罰は社會の仁惠より發せざる可からず、何となれば見べて罰則の目的は犯罪者の心裡に於て、必らず永存すべき善根を保護するに在るものにして、固より仁愛の主旨を離る可からず。

問 何を以て唯一教徒は神が人類の過失を永遠に責罰するものなりとせる正統派基督教徒の信仰條條を否認するや。

答 何となれば若し懲罰にして犯罪者を永久に苦しむるのみにして犯人を悔改移善せしむるの効なくんば、是れ徒勞無益にして懲罰の精神に違反するものなればなり。況や最善最愛にして靈智圓滿の天父は斯る不仁不肖の所爲あるの理あらんや。

問 如何なるものを以て眞の懲罰の法則となすべきや。

答 懲罰は實際箇々の罪科に相當すべきを要するものにして、若し常に虚偽を語る者ありとせば、自然此の人は朋友間に信用を失墜し、偶々眞實を語るも人誰れか之れを信ぜんや、此の如く懲罰は常に罪科の量と平衡を失はざるものなるが故に、世間の信用を失ふ事多き者は、其の人の虚偽の量多きを證するものなりと知るべし。眞誠なる目的に適ふ處の懲罰は人心に如何なる感化を與ふ可きものなりや。

答 懲罰は人をして眞に惡事の恐る可く、又自己を傷害するの甚だしきものたるを覺智せしめ、又其の人の同情心を刺戟して、惡行は獨り自己のみならず他人就中其の最近隣者即ち己れの愛する家族にも損害を及ぼすの具たる事を發見せしむるものなり。

問 總べて罪惡の上に科する最重なる懲罰は如何なるものなりや。

答 罪惡に對する懲罰の最重なる結果は即ち神の生命の裡に生息せる人の心靈的快樂と心靈的健康とを根蒂より絶滅せしむるものにして、恰も肉體の健康は新鮮なる空氣の呼吸に依らざれば保全せられざるが如く、人の心靈は神の仁惠を呼吸せずして健全なる生活を保持する事能はざるを以てなり。

問 困究は惡事を行ひし者のみ嘗むるものなりや。

答 古來直接或は間接に冤罪の爲めに肉體上の困苦を嘗めたる無罪者の事跡は往々人間歴史上の汚點として史乘に其の跡を印するもの少しとせず、然れども是れ當時の社會の犯罪にして冤罪者は斯る困究の爲めに毫も懲罰的の究苦を感ずる者に非ず、斯る究苦は廉潔の士の地獄に非ず、反て一種の名譽たる可きなり、彼のソク

ラテス、イエス、ホーロ、ペテロ、パンヤン等は皆な繯綯の辱を受け、近くは四十七義士に向て公儀の掟として死を賜へり、然して彼れ等は之れが爲めに其の心靈と名譽とを毀損せられざるのみならず、今日彼れ等の墓前に香華の絶へざるは蓋し今人の彼れ等の氣性を追慕し、反て當時彼れ等を所刑せし社會を罰するに非ずして、何ぞや、古人の詩に

“Stone wall do not a prison make,

Nor iron bars a cage.

Minds innocent and quiet take

That for a hermitage;

If I have freedom in my love,

And in my thoughts am free,

Angles alone, who sour above,

Enjoy such liberty."

石のから戸や黒鐵の	門の門はありとても
心しづかに潔よき	人を閉籠む牢ならず
我もし愛と思想との	自由を保ち得なれば
仙家に寝る心地すれ	斯る自由を久かたの
あほ空翱翔る天人は	只常しへに楽しまん。

とあるは即ち能く冤罪者の度量灼々として餘裕あるを明言せしものなり。

問 併し斯の如き事實を公平に解釋し得可さや。

答 如此天道の是耶非耶を疑はしむる場合を以て公平に解釋せんと

せば勢ひ吾人を誘引して萬民の生命は全く唯一なりとの道徳的觀察點に歸着せしむるものたり夫れ吾人個々の行爲は究極人類全體の完全と幸福を期するものにして決して人は其の一個人の完全と幸福とを私す可きものに非ざるなり故に社會の一個人は全體の完全を期するが爲めに往々困苦の分配を甘受するが如く是れと同筆法を以て快樂の配布をも受くるを得べき權利を有す現に惡人上に在れば下悉く彼れと共に災厄を負擔し聖人位にあれば民皆な其の慶に浴するの事實あり。

赦罪

問 他人若し己れに向て好意を表する時に於けると其の己れを犯せ

問 此時に於けると同一の感を爲すものなりや。
答 否な吾人は己れに好意を表せられたる場合には其の己れを犯せし時と同一に感ずるを得ず。

問 己れを犯せる者に向ても猶ほ好意を示すべきものなりや。

答 人として己れを犯せる者に對して好意を表示するは甚だ難しと雖も吾人にして若し自己の徳性を確守せんと欲せば如何なる暴悪者に對するも常に好意の念を忘る可からず然らざれば即ち暴を以て暴に報ゆるものにして既に他人の爲めに化せられ自ら好んで暴者に犯されたるに等し斯の如き場合に於て能く自ら忍んで其の好意の念慮を表章せば以て自ら守るのみならず終に彼の暴者をも感化するを得可きを以てなり。
問 悪人をして其の醜行より善行に移らしむるを得べきものなりや。

答 然り吾人は古來屢々人世の實驗によりて之れを見る彼の友情の力は實に罪人を悔改せしむるに最も有効なるものなり。

問 斯くの如き罪人或は己れに反抗する者に向て友情を表するを得可きや。

答 是れ實に容易なるものに非ずして其の目的を達せんとするに當りて非常の忍耐を要し時としては不慮の辛酸を甘受するの勇氣なかる可からず。

問 悪行を爲せし者が罪の刺戟によりて感ずる處の悲痛を何と名づく可きや。

答 一般に之れを罪人の懺悔或は悔改と稱す。

問 眞誠なる悔改は如何なるものなりや。
答 犯罪者の意中に於て悪行は己れを害し又他人を傷ふ事の最も大

なるものたるを了解し、再び悪行を爲さざるべしと自ら誓ふの實を擧ぐるものを云ふ。

問 斯の如き悔改者を社會は如何に遇すべきや。

答 懺悔せし者を以て社會は未だ曾て彼れの悪行を見ざりしと同然に信認すべし、何となれば彼は已てに罪惡の實に恐る可き思ひ可き由縁を解して、道德的智識の睡睛を開き、已てに従前に勝れる者たるを以てなり、若し社會にして猶ほ彼れを信ぜず、彼れを容れずんば、終に彼れをして善人の社會は非常に寂寥孤立的のものなりと誤認せしめ、更らに罪科を再びせしむるの恐れあればなり。

問 吾人を傷害したる者にして、猶ほ未だ悔改せずと雖も之れを宥恕す可きものなりや。

答 吾人は彼の過失は之れを宥し、又彼れに向て愛憐の情を有すると

雖も彼れにして若し眞に悔改の實を表す可き行爲無きに於ては、何人と雖も彼れを信ずる能はざるべし。

問 悪行者に向て如何に愛憐の情を起し得べきや。

答 悪行者は己れの悪行によりて彼自らを傷害せし事情と、又彼れが罪惡に誘惑せられし事物の狀態を觀察せば、何人と雖も茲に一片憐憫の情を催さざる者あらんや、惟ふに罪惡は常に犯罪者の喜び樂んで行ふ者に非ず、多くは彼の周圍の狀態は彼れの弱志を驅て悪行者の群に投入するものたればなり。

問 天何ぞ他人を宥恕せざる者を以て、悪行者と同一の位置にあらしむるや。

答 何となれば他人を寛容するの量なき者は悪者と等しく好意の心情彼れの裡に存せず、反て惡意の生命を持するの證たるを以て、天

問 何ぞ悪意を仁恕し玉ふものたらんや。

問 何をか徳義上總べての罪惡の根元とするや。

答 利己心嫉妬惡意は共に萬惡の根元なり。

問 何を以て神は吾人を宥恕するに躊躇せずと云ひ得るや。

答 何となれば吾人の尊奉する神は天父にして善意なり仁愛なり夫

れ善意仁愛は即ち仁恕を蓄積する大なるものなればなり。

問 神の仁恕と吾人の宥恕とは如何なる差ありや。

答 神ならぬ吾人は決して隣人の意思を透見するを得ず故に時とし

ては其の觀察を誤り人の行爲を誤解するものなり然れども神は

決して斯る誤解誤判に陥る可きものに非ず故に人間にして若し

數層完全なる位置に到達するを得ば斯る誤謬を免がれ共に神の

子女たるを得べし。

問 神の如き寛大なる仁恕を惡人或は墮落者に向て表示するは實際

出來得可きものなりや。

答 然り彼の善良なる勸化院の管理者或は監獄教戒者等にして其の

目的を達し成效を奏せる人々は常に忍耐愛憐友情を以て彼れ等

罪人又は不良の徒に接する事恰も醫師が恐る可き傳染病患者に

接して其の義務を全ふするが如し斯くて眞に神の仁愛と善意と

を實際に表章す其他善良なる双親は其の不孝の子女ありたる場

合に於ても亦同一の忍耐を表示するものにして是れ即ち人間は

神の王族たるの榮爵を擔ふ可き由縁なり。

問 現今社會に於ける罪惡の觀念は如何なるものなりや。

答 人智の發達は罪惡の上に於ける觀念に一進歩を與へたり今日道

徳上罪惡なるものを以て人間の無智幼稚普通動物的狀態の遺藥

或は人生の未熟、人生の發達に伴ふ一種の抵抗力及び道德的一種の疾病等の諸因が、種々異態を以て寄生物の如く人生中に一時の現象として發するものなりとせり、勿論夥多の道德上の罪惡は醜惡云ふに忍びざるものありと雖も、反て吾人をして斯る道德上の病者の不幸を感じ、同情を感ぜしむるに至るべし。

問 此の如き新觀察は果して實際人世に有益なるものなりや。

答 斯く道德上の罪惡を觀じ來れば、吾人をして自然に此の罪惡を治療するが爲めに奮發心と自信の念慮とを増加せしむるを得可し、蓋し健全なる神的氣力は確かに病的未熟の力に打ち勝つを得可きものにして、隨て人間の運命は斯る病魔を征服するに足るものたるを確知する敢て難からざるなり。
問 然らば救罪の原意は果して如何なるものなりや。

答 要するに救罪本來の意味は邪曲岐路に彷徨せる人心をして、人世の本道に誘導する仁愛的補佐たるなり。

○聖人

聖人に就て

問 生れながらにして人は才能を具ふる事ありや。

答 世に非常なる天稟の才能を具備せる者少なからざるが如し、就中有名なる音樂師ベートーベンの如き、宗教倫理に於て釋迦、孔子、基督、索克拉底の如き、工藝に於て電氣王エヂンソンの如きは實に著しき天才に富める者たるべし。

問 宗教、倫理、哲學、美術、政法等に就て、一種の天才を具ふるが如き國民

は何々なりや。

答 吾人は宗教倫理に在ては古代の猶太人、印度人を推し、哲學美術に在ては古代の希臘人を推し、政法に在ては古代の羅馬人を推すを得べし。

問 天才を具有する者は聖人たるを得可きや。

答 否、天才を具するも必ずしも聖人たるを得ず、何となれば聖とは正確なる意義に於て完全と同一義なるを以て、苟も聖人たる者は必ず完全に其の天才を具備せざる可からずと雖も、翻て天才は必ずしも聖人の如く完全ならざるも亦可ならんか、勿論天才ある者は常に完全圓滿ならん事を企望する者にして、蓋し天才を具する者は最早圓滿に近侍する者たるや明かなり。

問 然らば聖人は天然普通の人間に在り得べきものなりや、將た超自然

間的人間なりや。

答 聖人即ち完全圓滿なる善人とは、眞に吾人の天然的性質を成就せし者にして、吾人若し天稟の理性と徳性とを實現せば、已てに完全圓滿たる善人即ち聖人たるを得べし。

問 古來聖人の上に如何なる謬見を下だせしや。

答 聖人とは古來一種特別にして、超自然的人間の如くに謬想せしは『才子多病』の謬の如く、其精神は兎も角も、肉體は大抵虛弱にして、精神の發達と相伴はざる者の如くに想像せられたるが爲め、聖人賢人の美名恐くは誤用せられたるに非るなきを得んか、蓋し古昔に在て、所謂聖人なる者の多くは一種の病的人物に非ざりしか、然らずんば、胡ぞ超自然的人間視せらるの要あらんや。

問 完全なる善人とは如何なる者なりや。

答 聖人即ち完全なる善人とは健全なる身體を具足し、隨て天稟の良智良能をして活潑に使用し、以て現社會の公益を圖る者の謂にして、決して精神病的人間の妄想を空中に畫くが如き者の類に非るべし。

問 人は神の如くなり得べしとは如何なる意味なりや。

答 此の壯嚴美妙の宇宙を以て神の聖旨を顯し給ふものなりと感得し、翻て自己の精神と肉體との關係に向ひ、此の觀念を應用するに當りては、吾人は如何に靈妙なる心靈より此の活潑なる思想と、可愛の肉體とを現象したるやを感得し、或は神と宇宙と唯一融合するが如く、人も亦其の心靈と肉體と唯一に融合せるを智覺せば、茲に始めて理想の妙處に逍遙するを得べし、此の如き状態を稱して人は『至誠にして神の如し』と云ふを得べし。

問 聰明靈智にして善良なる天才を具有する者は、此の人間社會を裨益するを得可きや。

答 然り斯の如き人の社會に與ふる恩澤は實に自利主義を以て福音と誤認せる人々の社會に害毒を流すの反比例を以て社會を裨益するものなり、彼れ等の良智良能は發しては山上の垂訓となり、暗夜を照すの燈火となり、終に神と人との間の電信線ともなるに至らざれば止まざるべし。

耶穌基督

問 耶穌の生涯の特質は如何なるものなりや。

答 耶穌は實に完全圓滿なる善人の生涯、即ち神の子の生涯を送れり。

吾人は彼れの純潔なる生涯によりて神の道德的屬性と人心の道德的可能力とを實際に見るを得たり蓋し耶蘇は天父の慈悲心を吾人に表明せんが爲めに來れるものなればなり。

問 當世の人は何を以て耶蘇を神の子となせしや。

答 古の人は耶蘇を以て當時の意味に於て容易に神の子と想像せり、何となれば當時已てに一般の英雄豪傑を以て盡く神の愛子と想像し、甚だしきに至ては猶ほ在世中の帝王をも神と封じたるの例なきに非ず、故に耶蘇が斬新なる豫言者として、或は一種の英雄として世間に知らるゝや、彼れの仁愛と熱心と全然利己の心なき言行とを見聞するに及び、人々は直ちに耶蘇を以て神の獨り子と叫び稱ふるに至れり。

問 耶蘇の天才は如何なるものなりや。

答 耶蘇は聖人たるの故を以て或る一種の美麗なる天才を具有せり、就中正義、仁愛及び宗教的天才に至ては眞に完全の域に到達せり、故に耶蘇の天真爛漫たる處は専ら宗教的方面に在りと云ふを知るに難からず、何となれば彼れは正義と仁愛即ち宗教的眞理の爲め全く其の死を甘諾せるを以てなり。

問 耶蘇の氣力は如何なるものなりや。

答 耶蘇は宏大なる氣力を有せり、故に彼れは明らかに善の必らず惡に勝ち、遂得可き事實を立證するの力あり、而して彼は其の短かき生涯中に困難、苦痛及び虐殺に遭遇せりと雖も、反て此れ等の惡を征服するの力を有し、終に善良なる應報を得たり、蓋し彼れの殘忍なる死を迎ふるや、曾て彼れが存生中に得たる同情よりも、更らに數層の愛情を全世界の人類より享くるに至れり。

問 耶蘇に與ふるに如何なる尊稱を以て適當なりとするや。

答 耶蘇に與ふるに眞實圓滿なる善人即ち聖人なりとの尊稱に勝れる賛詞なかるべし然れども或る人々は耶蘇を以て人界の至聖者よりも一層宏大なる名稱を與へんとして其の極終に「眞の神なり」と呼び彼れを強て潜上の人即ち神を冒瀆する者たらしめざれば止まざるに至れり是れ豈彼れを尊崇するの道ならんや加之耶蘇は未だ曾て斯る大膽なる非望を有せし痕跡だに發見する能はざるに於ておや。

問 耶蘇は只だ人界の聖人にして超自然的の神ならざるも彼れを以て宗教の開基者として尊崇し敬愛するを得るや。

答 然り耶蘇は或る種の人々の主張するが如く超自然的即ち人間以上の者なりと信ぜざるも吾人は優に彼れの性行に就て尊敬と敬

愛の眞意を表し得べきものにして歴史的眞の耶蘇と吾人との間に於ける親密の同情は之れが爲めに毫も輕重せらる可きもの非ず何となれば彼れは眞に人間として吾人の屢々遭遇する處の誘惑に遇ひ或は時として自己の生涯を如何に處すべきやを定め難く憂心忡々として失望の域に迫り或は世人に誤解せられ單獨にして協力者なく四面に楚歌の聲を聞き彼れは其の同胞に凌辱せられたり然れども耶蘇は強盛なる氣力を以て盡く之れ等の逆流に反抗し死を以て之れを征服せり斯の如き熱心に向ては如何に冷淡無頓着の輕薄者と雖も豈同情の感勿からんや之れに滿腔の同情を表することを人の至情と謂ふ可きなり。

問 然らば耶蘇は神に非ざりしや。

答 耶蘇は或る人々の主張するが如く宏大無邊なる意味の神即ち無

限絶對にして萬有の大原因たらば何を以て或る時は誘惑せられ
 或る時は哀み或る時は祈り又或る時は失望の淵に沈みたる事跡
 あらんや故に吾人は斯る陳腐の鬼神説には全然左袒するを得ず
 反て耶蘇の曾て教訓せし如く人類は神の愛兒なりとの主意に於
 て人間は盡く神性を具有すとの意見は彼れの宗教信徒彼れの尊
 崇者として疑念なく信認するを得べし。

問 耶蘇の己れの主義に對して盡せし忠義の程度如何。

答 耶蘇は愛の爲め其の最重最愛なる自己の所有物件をば盡く他人
 に與るに吝ならざりし故に彼は其の全體を擧げて之れを仁愛即
 ち正當と認むる處の主義に與へ終に己れの生命をも懸んで之れ
 に捧げたり。

問 然らば之れによりて耶蘇は後世の人心に如何なる作用を與へし

や

答 歴史的耶蘇は眞に吾人の理想なり何となれば耶蘇は吾人に對つ
 て仁愛と正義の爲めに總へての有を盡く喜んて與へざる可から
 ずとの理想を與へたるが故に今猶ほ彼れは社會の原動力即ち理
 想となれり。

問 耶蘇は果して新宗教を開基するの目的を有せしや。

答 何處に於ても彼れは新宗教を開基せんとするの目的を有せりと
 の確證を發見する能はざるべし單に猶太國民の思想中既に蘊
 蓄せし處の理想を純直に實現し當世の注意を喚發せしに過ぎざ
 りし。

問 耶蘇は神人の關係を如何に比較せしや。

答 彼れは神の概念を表白するに當り萬民の最も容易に感得し得可

問 き父即ち天父なる名稱を以て之れを表白せり故に彼れは又萬國の民を以て盡く同胞なりとせり。

問 耶蘇は如何なる者を以て天國の民となせしや。

答 彼れは他人に善行を施し他人の爲めに盡し得る者を以て最大幸福なる人物とせり故に自利のみを目的とする者を以て極悪最小人となし以て天國の民たるに適せずとせり。

問 耶蘇は財産の私有權を以て如何なる程度に看破せしや。

答 彼れは仁恵と愛恤との氣風社會に隆盛なる状態を以て人世の殷實なりと信じ隨て總べての財産は社會の公益を増殖すべき媒介物と信じ此の條件の下に人々各自の財産所有者たるものなる事を承認せり。

問 耶蘇の生國たる猶太國人は古來如何なる宗教を奉ぜしや。

答 猶太人は盡く希伯來教を信奉せり。

問 希伯來教は萬國民に普及すべき性質を有するや。

答 希伯來教を奉ぜんとする者は何人に關らず或る一定の風俗習慣に服従せざる可からず換言せば全く猶太人に歸化し其の國古來の風俗習慣に嚴重に浸染せざる可からず如此困難は終に猶太教をして世界的宗教たるを得せしむる事能はさらしめたり。

問 耶蘇は斯る希伯來の風習即ち當時の四國の理想に全く化せられざりしや。

答 彼にして若し全く此れに化せられし事なくんば耶蘇は普通人情に疎き不具者にして到底一般の人情を以て其の性行を律し之れを討究するの道なきに至るべし然れども彼れは斯る不具者に非ざる限り必らず之れが多少の感化を受けたりしや勿論なり。

問 耶蘇の時代に於て其の燒點に達せし猶太人の思想の潮流は如何なるものなりや。

答 猶太人は當時政治上の不幸と困難とに屢々遭遇し過去のダビデ王シロモン王の時代の如き繁榮は到底現世に於て望む可からざるものなりと失望し、或る一種の歴世的感情に驅られて想像せる空想を將來に盡さ以て自ら慰するの具となせり、此の想像は即ち神は此の世界を一新せんが爲めに他日此の世界の終局は來るべし、其の際に於ては善者悪者の審判、即ち神の選民たる猶太人を之れを虐待せし他國民との裁判を開庭せらるべしとし、或は之れに先づて猶太國の嚮導師即ち救世者なる者降誕し、以て隣國の蠻夷を平定し、再びシロモン時代の榮華を回復すべしとし、或は人の運命の拙劣なる者は今生中より惡鬼なる者の據る處となるべしと

するが如き迷信妄想を有せり而して耶蘇も亦多少此れ等の風潮に化せられたりし證據は福音書中處々に散見せり然りと雖も耶蘇の教訓の心髓に至ては猶太人の風習を脱却し、普及的宗教の特性を具有せり、何となれば其の訓戒の基礎は普く人間の良心並に人間の宗教心の根底にありて、彼の國の風習慣行の一部に固着せる希伯來教の弊害を脱却せるものなるを以て、其の説く處能く萬民の心腑に貫徹するを得るものなり。

問 耶蘇の信仰を總括すれば如何なるものなりや。

答 彼れは此の宇宙を以て神の世界なりとせり、換言せば此の世界は神聖なる宇宙なり、又人間を以て神の世界の住民とし、天父の如く神聖なる神の子女たるに適ふ生活を遂げざる可らずとせり、隨て人の品行は方正潔白にして天父の正義仁愛を其の同胞に示さ

る可からざる由縁を主張せり

問 古來耶蘇の如く蒼生を訓戒教導せし者ありや

答 然り支那印度ヘルシヤ希臘羅馬等の聖賢の高尙なる遺訓は皆盡く耶蘇と相類似せる訓戒を垂れ後世を裨益せり蓋し是れ等の聖賢と雖も亦多少其の國家在來の風俗習慣の感化を受くるに至ては基督の猶太國風に於けると敢て甲乙なきが如し

問 耶蘇の他に正義仁愛の爲めに其の身命を犠牲に供せし者ありや

答 然り古來各國に於て屢々斯る聖賢が俗世の逆流に立ちし類例あり諺にも「親の殺せし聖人の紀念碑は多く殺戮者の子孫によりて建てらる」と云ふを以て見るも亦明らかニ聖賢が屢々社會に志を暢ぶるを得ずして虐待せられたりし事實を推測するに足れり孔孟の聖賢にして王者の位を得ず生涯各邦の間に流落し終に志を

得ずして死し紫克拉底は愚者の讒構によりて毒杯を擧げ爲めに

普通一般の考ふるが如き天壽を全ふする能はざるが如きは即ち

その一例に過ぎず然れども斯くの如き人々にして始めて惡に打

ち勝つの方ある者なり何となれば困窮虐待に接して常に其の善

意を失はず辛酸は不平なく甘受し利を以て誘ふ事能はず死を以

て強迫する能はず大節を持して動かず刀刃以て斷つ可からざる

剛志の人は即ち惡を征服せし勇將たればなり

神の化身

問 人間を以て神の子と呼ぶの理由を明かにせよ

答 神の子とは即ち人の心靈は神性を具有せりと云ふ信仰より来る

換言せば人間の裡に伏在せる心靈即ち人の思想と愛憐する處の能力は宇宙の聖靈即ち神の奇しき意思と同一種類なるを以て人は神の子なりと云ふものなり、惟ふに物質は宇宙間何處に至るも盡く唯一なるが如く、思想即ち靈に於けるも亦唯一なりと確認するに難からざるを以てなり。

問

一般の基督教徒は耶穌を以て如何なる者なりと信ずるや。

答

正統派と自稱する基督教徒は耶穌を以て無限絶對の神が自ら肉體を執つて人間となり此の世界に降臨せるものなりとし、之れを尊崇禮拜す、斯の如き思想を以て神の化身と名づく、即ち神は人身の中に生息するの意なればなり。

問

如何なる理由に依り斯の如き化身説を主張せしものなりや。

答

耶穌の愛情を以て神の仁愛の發表とし、其の源を神に發して耶穌

の肉體中に流注せしものなりと想像せり、之れが爲めに耶穌は神が肉體を被れる者たりとせり、此の如く世人は迷信に妄想を重ね、終に耶穌の心靈を以て「至神の神」なりと牽強し、古來正統派基督教徒の信仰箇條の文字章句の上に於て、此の化身の説を附會するに當り非常なる苦辛を嘗め盡くせり、然れども此の説の最も甚だしき誤謬は單に或る一個人即ち耶穌のみに神の仁愛が發現せりとして他に神の無限なる仁愛の顯現せる事實を否定するに在り、之れに反して今日世界の實際の事實を通覽すれば、神の稜威と仁愛は何處に論なく至誠正義仁愛として萬民の良心、即ち人の心靈の裡に燦爛として輝き亘れり、之れを蔑視する處の化身説は豈將來の心靈を支配し、吾人の理性を満足せしむるに足らんや、吾輩は寧ろ宇宙を以て直ちに神の化身なりとするの説を以て最も公平な

る化身説となす。

○唯一教

主義

問

唯一教の主義とは如何なるものなりや。

答

唯一教徒は左に掲ぐる三箇の根本的主義を有す。

基礎 吾人は口碑或は教權に依らず合理的大道科學的眞理を以て基礎となす。

方法 吾人は全く自由討究を以て研究の方法となす。

目的 吾人は一個人及び社會の道德をして益々高尚なる地位に

發達せしむるを以て目的となす。

問

右の根本的主義の他に唯一教徒の一致せる點なきや。

答

右の根本的主義は唯に唯一教徒のみならず人として苟も公明正大なる信仰を樹立せんとする者は何人と雖も之れに同意を表す

可きは當然の事なり故に此他更らに唯一教全體の一致せざる可からざる條件なしと雖も人心自然の傾向は唯一教徒をして更ら

に夥多の相一致せる點を發見せしむるものにして左に目下多數の唯一教徒の信仰を列擧すれば

第一 宗教とは人類の上帝と關係する由縁を自然に表明するものなり。

第二 基督教の根本思想は神を以て天父とし人類を以て同胞とするに在り。

第三 神は永遠無究の權力智恵仁愛にして物質界精神界の源泉

教導者及び整理者なり。

第四 人類は神の創造力の最も高大なる生産物なり、隨て其の發達すべき勢力と心盛とを有し、且つ宗教的、道德的、感情を有す、故に又人類は神の子と稱ふるを得べし。

第五 世界の諸宗教は各優劣の差別ありと雖も其の本源は盡く

同一に出で、隨て其の目的に於ても同一に出づるを以て相互に教友として親睦すべきものなり。

問 何故に斯の如き基礎を宣言するの必要ありや。

答 唯一教は宗教として實に一種特色を以て社會に成立するものにして、彼の各國に現在せる宗教の如く、祖先傳來の口傳的教義を以て是非に係らず立教の大本と爲す者に非ずして、合理的、大道即ち科學的眞理を以て立教の基礎とする者なり、故に宗教的事物は祖

師傳來の教義或は慣例なるが故に之れを尊信するに非ずして、是れ能く道理に適ひ、實際に科學の眞理と相並行して悖らざるが故に尊信するものなり、然るに廣く世間の宗教界を見渡せば、往々にして其の説く所道理に適ふや否やを論ぜざるのみならず、宗教の眞理は世間の道理を以て標準として論ず可きものに非ずとなし、只だ宗教、幽玄の妙理は人間智識以外に位する者なれば、超自然的、人物が神佛の托宣を直接に傳へられたる者に非ずんば、以て其の玄理を闡明する能はざるものとなし、而して其の教理の由來する處を尋ねれば、即ち曰く、教祖何某なる者夢に神托を蒙り、以て教法の基を立つとし、教祖の奇跡的、事物は盡く歴史上の事實なりと斷定し、敢て其の裡に疑問を容るゝを許さざるは、通例一般宗教界の所論なり、故に此の如き宗教を信せんと欲する者は、須らく先づ自

己の智識の價値を全然宗教上の事物の上に否認し、之れと同時に世間の道理も一切宗教界に在ては無用のものたりとするに非ずんば、以て眞實なる信者たるを得ざるに至るべし、然るに唯一教徒の所見を以てすれば、宗教も亦他の哲學科學と等しく、人間社會の一現象にして、哲學科學にして、苟も道理に背反する處のものは、如何に哲學の泰斗、科學の大家の所説たりとも、之れを否定するを以て當然とするに、獨り宗教的事物のみ先人の精粕を甘受せざる可からざるの理なしとす、故に唯一教徒は他の宗教信徒の如く、宗教的事物と他の學術的事物との間に本質的の差別あるものなりとせず、宗教も亦人間社會の諸現象の一として、之れを解釋説明し、人類一般の道理心に對照したる上、彌ま眞理と認識するものに非ざれば、以て信仰の基礎とし、身命を捧げて熱心に信仰す可きものに

非ずとなすに在り。

問

何を以て自由討究を主張するの必要ありや。

答

普く一般の宗教を見渡せば、何れも口碑、教權、教會の意見、聖書、經文、信仰、箇條、宗師の相承等の上に立教の大本を建つるものなるが故に、之れに向つて批評、討論を嚴禁す、勿論此れ等の條件にして盡く道理に適ひ、今日實際の事實と齟齬する事無くんば可なるべしと雖も、事の實際に至りては、未開時代の口碑と地質學者或は人類學者の發見せる新事實と、天に齟齬し、教會の意見は人心を束縛、抑壓するものとなり、聖書、經典の所論は進化の眞理と近世人智の華たる哲學の道理と背反し、信仰、箇條と宗師の相承は、幽玄不可思議にして、科學の光明一度發射せば、直ちに褪色するものたるを如何せん、惟ふに斯の如き、虛弱なるものの上に立教の大本を定むるが故

に勢ひ之れが批難を恐るゝものたるべし之に反して千歳不磨の眞理の上に立教の基を据たるものならば近代の批評歴史的科學的研究は益々其の光輝を加ふ可きものにして之れが色素の退消を恐怖し批評討究を禁壓するの理あらんや唯一教は全然斯の如き信仰の上に薄弱なる前提を置かず合理的科學的の眞理を以て基礎となさんと欲するを以て勢ひ討究の自由を獎勵し益々練て益々精髓を得んと欲するに在り普通一般の宗教界にして祖師何某の遺訓なるが故に門徒たるもの之れに向て彼是批評を許さずとし或は聖書の明文あるが故に何々は動かす可からずとするが如き宗義の世間に跋扈する間に於て合理的宗教の光明を社會に透達せしめんとするに當てや勢ひ研究の範圍を擴充し自由に宗教的事物の討究を主張せざる可からざるに至れるなり何となれ

ば凡そ眞理を發見せんとするものは獨り宗教のみならず天文學にても地質學にても將た醫學にても何某氏の所説に反抗す可からずとして討究に制限を加ふる事は果たして策の得たるものなりや天文學地質學醫學にして未だ曾て之れが制限を加へられたるを聞かず況や比較的遙かに高尚幽玄なる宗教的眞理を發見せんとする者に於てや

問 個人的社會的の道德を高尚ならしむるの目的は唯一教徒ならざるも亦同一なるに非ずや

答 然り苟も人として個人的并に社會的の道德の高尚なるを願はざるものあらんや故に唯一教徒も亦其の大目的を達せんが爲めに合理的信仰をも要し討究の自由も要するなれ茲を以て上述の如く唯一教は普通一般の宗教家等と立教の基礎に於て研究の方法に

於て天淵も只ならざる差異あるに關らず此の大目的に向て進歩するに於ては萬人と共に同一徹に出づ故に又天下の宗教は相互に交友たるものたりとの普通信仰を産出するものなり。

同 唯一教の基礎と他教の基礎とは果して本質的に差異あるものなりや。

答 吾人は或る意味に於て本質的の差異なかるべしと信ず何となれば吾人は口碑或は教權に依らずして道理に依り真理と認むるものを以て信仰の基礎とせり然れども彼の一般宗教家の口碑或は教權に依る由縁は彼れ等は之れを以て眞に道理に合へる真理なりとし信仰の標準となせる者にして彼の信仰箇條の如きも當時之れを制定せし高僧等は之れを以て合理的信仰なりとし眞實人生を裨益するに足る可きものなりとして選定せしものたれば彼

れ等に於ても事の實際に於ては合理的大道と認めしものを信認するものなり然れども只だ吾人の如く自由に討究し果して自己の所信に誤謬なきや否やを試験するの勇なきに依れり吾人と雖も敢て先人の所論を盡く根底より否認するを以て快とする者に非ず然れども之れを取捨選擇するに各自天稟の智能を以てし決して胡椒丸呑み法を取らざるの差あるのみ。

（唯一教徒普通の信仰の問答は紙數の都合にて略す。）

唯一教の起原及其の略史

問 唯一教は何時の頃に於て起原せし乎。

答 或る意義に於て唯一教は人類が抑も宇宙間に唯一なる神ありと

信ぜし時業に已に起原せるものにして、惟ふに唯一教なる名義は、専ら唯一神教を意味するものにして、譬へは古代の猶太教徒或は初代のキリスト教徒の如きは此の意味に於て無論唯一教徒たるものなり、併し今我輩の茲に特に引用する處の唯一教は殆んど今を去る事四百年以前より、近世の特別なる進歩的現象の一つとして社會に顯はれたるものなり。

問

唯一教は如何なる場合に於て起原せし乎。

答

大凡今を去る事四百年前、歐羅巴洲に於ける文學の恢復に伴ひ、宗教も亦他の哲學、科學、技術、文學及び政治等と共に、合理的自由思想より蘇生せしものにして、此の宗教に對する合理的自由思想の結果は、終にキリスト教國の夥多の學者をして、従前キリスト教國に在て最も權威ありし彼の神學上の三位一體説を拒絶せしめ、此の

問

近世の唯一教徒は其創業の時に當て如何なる境遇に接せし乎。

答

抑も近世唯一教の世に出づるや、其始めに於て常に反對教派の爲めに虐待せられ、隨て之れに忠死せしもの實に夥多なりし、故に新たなる唯一教々義は當時キリスト教國に於て最大權威ありし羅馬加特力教會の爲めに刃と火とを以て迎へられたり、或は又キリスト新教徒が宗教改革を企てし後と雖も、殆んど一百年間は歐羅巴西部の諸州に於て常に羅馬加特力教會の爲めに、唯一教徒と等しく迫害刑戮せられたる事跡屢々之れあり、併し宗教的自由思想は、彼の已に研立せる羅馬教會或は反抗教會等の之れに向て敵意を表はすにも關はらず、次第にその勢力を逞ふするに至れり、而して當時宗教的自由思想家は、羅馬の法王或は反抗正統派教會の信

仰箇條よりも寧ろ宗教の解釋に向つては道理の權威ある事を承認せるの場合に立ち至りたり當時歐羅巴の東北西の三方諸州に於て唯一教徒の數著しく増加したりしかども如何せん今より殆ど一百年以前迄は歐洲各國至る處何れも唯一教徒として教會或は協會等を組織するを許さざりし如何となれば當時政治上の權威は常に羅馬加特力教徒否らされは反抗正統派教徒の手に歸せり現に英國に在て第十八世紀の頃に於てすらも彼の三位一體の教理に反對する著作或は公開演説を爲せし者は之れを罰するに死罪を以てせり。

問 第何世紀中に於て近世の唯一教徒は始めて組織せられし乎。

答 今を去る事大凡三百年前歐羅巴の東部諸州即ちポーランド及び

トランシルヴァニア(今のオーストリア國の東南部を云ふ)に於て

四百箇の唯一教會及び十一箇の大學校を起せり然るに其後此等の國々の政教を混交せる權威は羅馬法王の掌握に歸すると同時に無慘にも此等の教會及び學校は盡く羅馬教會の鮮血淋漓たる腥き手の爲めに滅ぼされたり此の慘酷なる出來事は實に唯一教會の蘇生に達する一百年前にありき以來此の唯一教會の組織は英米の兩國に於て續々として開始せられ英國に於ては一千七百七十四年ロンドン府に於て組織せられたる唯一教會を以て其鼻祖とし米國に在ては一千七百八十三年ボストン市キングスチャペルを以て最初の唯一教會とす茲に於て之れを見ればキリスト教國に於て近世の合理的(或は學理的)自由精神は唯一教を容るべき勢力を得るや否や唯一教會は直ちに歐洲に於て組織せられたるものたるを知る可きなり。

問 唯一教徒の開基者等は當時如何なる困難を排して歐米各國に興りしや。

答 「ユニテリアン教は宗教革命の其始め、一つの異端外道として英國に起り、當時に在ては異端「アナバプチスト」派の名目の下に忠死し刑場の露と消へ果てし者其數夥多ありき、是れ即ち古代の「エリアン」派今日の「ユニテリアン」教徒なり而して第十七世紀に於ては、未だ「ユニテリアン」教會の組織成らずと雖も「ユニテリアン」教徒の神に對する信仰或はキリストに對する見解は當時學識名望ある人士の間に漸々波及するに従ひ、英國々教會は勿論、其他普通キリスト教徒の間に爭論の熱度を高めたり、有名なる詩人「ジョン・ミルトン」、哲學の大家「ジョン・ロック」及び「アイザック・ニュートン」氏の如きは全く「ナントリニテリアン」即ち非三位一體説の主張者なりし。

第十八世紀に至ては、益々其氣焰を増發し、夥多の英國長老教會及び英國に於ける「プロードチヨルチ」の人々は當時「ラチユードアン」の名目を以て呼はるゝに至れり、故に英國々教會の牧師、傳教師等は互に確定不變なる信仰箇條、教會規約の如き者を制定し、以て相結托し、倍々外に對するの策を講ずるに至れり、此の時に際し獨り「セオフォイラス・リンゼイ」氏は彼れの故郷なる「ヨークシャー」州「キヤテリック」に於て營みし處の生業を棄て、「ロンドン」府に到り、エセックス街の或る會堂に於て第一「ユニテリアン」教會なるものを世に公けにしたるに由り、英國の長老教會に於ても別に信仰箇條を設けず、大博士「ブリエストリ」氏の如き人々の運動に由り益々自由信仰に傾き、此等の人々は終に「ユニテリアン」教徒の名を以て呼はるゝに至れり、然れとも此の名目は其當時に在て尙ほ異端外道と

して衆人の嫌惡する處なるが故に、動もすれば其教會の上に不幸なる國法の來らん事を恐れられたれば、其教會政治及び組織等は猶ほ舊長老教會の如くにし、一方政治上の責を擲き、且つ順を逐て進歩の途を開けり、其他舊派浸禮教徒の間に此の新思想漸次波及するに逮んでや、其多數は終に「ユニテリアン」教徒と一つの連絡を通ずるに至れり、而して當時蘇格蘭に於て最後に三位一體説に反對するの故を以て「胃瀆罪」に判定せられ、エヂンブロー市近郷に於て磔刑に附せられし一つの壯快なる書生は其名をタムス・エイキンヘツドと稱し、實に一千六百九十六年の事なりき、蓋し當時エヂンブロー市に於ける宗教家は極めて頑固なる「カルヴィン」派の門徒なりしが爾來自由討究の方法を適用して「エリクシア」派に轉じ、漸次に仁慈主義の「ユニテリアン」派に轉するものあるに至れり。

問 唯一教徒は過去一百年間に於て如何なる進歩をなせしものなりや。

答 唯一教會は其の組織せらるゝや甚だ迅速なる發生を爲さざりき、而して唯一教會の歴史は實に究迫と殉死とを以て充滿せり、故に唯一教會は彼のキリスト教國に於ける宗教的團體の一として非道なる精神上の虐政の爲に壓制せられたるは疑ふべからざる事實なり、此の故に其斷然自立するや更らに他の宗派様の團體を組織する事を忌避せり、如何となれば其の新宗派を組織せるに由て又更らに各自の上に新たなる虐政の君を戴き、隨て自他の思想或は精神を束縛するに至らん事を恐れられたればなり、當時歐米諸洲に散在せし唯一教徒は彼等各自の信仰又は思想上の自由を妨ぐるの恐れある處のものは何物に限らず盡く之れを成立せしむる事

を惡みたり然れとも信教の自由が一般の輿論となりて其の安全なるを保證せし以來唯一教徒は日々各自の信仰を補佐し、又は自由なる合理的宗教を弘布するか爲めに多少活潑なる運動を始め、或は教會或は俱樂部等を組織せり、而して近世の一種特別なる勢力として、唯一教徒は各々個人的の働きを以て普通文學界に顯はれ、或は演説に或は著作等に從事せり、之れに由て唯一教徒は他の各宗派の働さに比しては歐羅巴及び亞米利加諸洲に於ける近世宗教界の思想及び生活の上に廣大なる普及力を與へたり、而してキリスト教の各派及び羅馬加特力教會の如きも亦多少此の近世の合理的宗教思想の爲めに感動せられ、就中唯一教徒は此の合理的宗教思想の先導者又は代表者として世上に知られたるものにして、唯一教は此の廣大なる字義の範圍内に於て近世の合理的自

問

由宗教思想の發生力たる事は疑ふべからざる事實なり

當世紀に於ける唯一教の著明なる結果は如何なるものなる乎

答

當世紀中に於て、特に唯一教をして顯著ならしめしもの二あり、

其一、人類の今や已に信認せる處の哲學及び科學の新世界を發見せし事により、唯一教徒の嚮きに艱難の中になせし運動の要用た

りし事を明かに是認せし事は是れなり、當時唯一教徒は將來の宗教

界に於ては確かに其合理的信仰の上に安堵するを得る事を信じ、

彼等は哲學及び科學の眞理と宗教的眞理とを全く一致せしむる

ことに於て宗教の發達を企圖せられたり、而して此等の運動は先

づ以下に列擧する處の有名なる開路者の爲めに創始せられたり、

即ち博士ウキルリアム、エーリッ、チヤニン、グ氏の如き、シエドウ、バ

ア、カー氏の如き、ラルフ、ワイルド、エマルソン氏の如き、其他今日

現在する夥多の教師又は學者等に由て大に其進歩を獎勵せられたり、就中其最も著明なるは英國にゼームスマルチノ博士あり。其二、唯一教徒の團體に對する、最初の感情的恐怖心又は不信は漸次消滅せし事是れなり、唯一教徒は合理的宗教の實行及び其智識をして倍々高尚なる域に發達せしむるの道を求めんが爲めに、從來の協會は勿論尙ほ處々に活潑なる新協會を組織す、且つ其維持法に於ても更らに完全なる方法を以てせり、されども唯一教協會の組織は幸にして未だ曾て彼の想像的天啓說或は法王の威光の上に立てられし處の教會の如く、其會員の上に強制又は專斷的威權を恣にするに至らず、否な將來に於ても必らず如此境遇に至らざるべし、唯一教徒の組織せる協會の性質に付き、今特に注目すべきものは即ち自由獨立なる宗教思想家の協同に在るなり、是れ恰

問 唯一教今日の狀態如何。

も今の哲學者或は科學者等の協同せる團體、或は協會に等しきものにして、決して通常キリスト教國に於ける專斷固定の教會的組織に類するものにあらざるなり。

答 一般の思想及び生活上に於ける勢力として、唯一教は今日の如く深く人心及び其の生活を支配せし事あらざるなり、現に今日の正統派基督教會の多數の說教者、或は有識者は今より五十年前に於ける唯一教徒の說を主張せり、而して宗教上に關する文學者は今日となりて全く合理的のものたらされは世に容れられざるに至れり、現に今日多數の著名なる政治家又は學術家は其宗籍を何派に置くにも關はらず、皆な自由なる合理的宗教家となれる者なればなり。

扱て今日(一千八百九十一年)唯一教なる名義の上に組織せられたる宗教的協會は歐羅巴諸洲に於ては實に夥多あり現にホングリ國に於ては百十箇處の教會及ひ之に附屬する三箇處の大學校ありて中には随分著名なる博識者又は文學の士あり。スウツル國に在ては今日の普通教會にて唯一教徒及びオーストツクス基督教徒三位一體説を奉ずるもの(を混交して特に區別せされとも、其中には多數の唯一教主義を取れるものあり就中同國ゼンザア府に於ては其昔彼のキヤルヴン(オーストツクス派中の一派をキヤルヴン派と云ひ同氏の開基する處に係る)の出生せし地にして現にサーヴタス(第十六世紀の半ば頃に於て唯一教主義を奉ずるの故を以てキヤルヴン派の爲めに焚燒せられし者を焚殺せし地なるにも關はらず今日に在ては自由信教即ち唯一教主

義の大に流行するを見るに至りたり。

瑞典(スウェーデン)那威(ノルウェー)の兩國に於ては已に教育を受けたる人士の間に於て此の唯一教の主義を懐抱するもの實に夥多なりと雖も如何せん同國今日の國法に依り三位一體の教義即ちキリストの神性を信せざる宗教的組織の存立を嚴禁せられたるか故に有望なる唯一教徒も手を束かねて爲す事あるを得ざるの場合なり。日耳曼聯邦に於ては古來自由思想の恒に發生せし處たりしが就中近世に至りては其學術の發達を以て著明なり同國政府の一千八百六十一年に於ける統計年鑑を閲するに只だ南方日耳曼に於てすら當時已に二十五萬五千人の唯一教徒ありしを見る其他同國のプロテスタンチンフェライン(新教家の聯合協會)の如きは自ら唯一教徒の協會ならざるも唯一協會に向て自由に之れと聯合

する事を承認せり、同國に於て唯一教文學は普く世間に流布せられ、現にチャンニング氏或はバアカー氏の著書の如きは日耳曼語を以て翻譯せられ、弘く其販路を有するを見るは即ち其實證たり。佛國に於ける自由派プロテスタント教徒は、大に吾人の注意を喚起する處のものにして、唯一教徒の羽翼とも云ふべきものなり、而して之れと聯合する人士の内には有力なる宗教家、教育家、文學家及び政治家等あり、就中吾人の常に耳にする處のものは、彼の有名なる亞米利加の唯一教開導者チャンニング博士の著書が佛國に於て好評を博する事是れなり。阿蘭陀に於ける自由宗教家等は、未だ唯一教徒の名稱を冒さざるも、其實は唯一教徒と同主義なるものにして、其勢力は實に強大なり、同國の有名なるライデン大學は現に其配下に在り。

現今英國に於ける唯一教會の數は三百五十箇にして、此等を總括して成れる一箇の大英國唯一聯合協會及び夥多の地方中會あり、其他慈善的協會等は枚擧するに遑あらず、就中其最も新しき慈善的運動はロンドン府に在ては彼のロバート、エルズメヤアと名づくる宗教小説を著作し、名を十九世紀の小説家中に轟かせし、ハインレイウアー、ド婦人に由て創業せられ、専ら貧究の子弟に教育を與へ、其他貧究人を補助して普通生活の道を得せしめんが爲めに設くる處のものにして、同しく唯一教徒の保管する處たり。其他蘇國及び愛兒蘭のプレスビテラン教會も亦近年大に唯一教の自由的思想の爲めに感化せられしものあるを見るに至れり。北米合衆國に在てはアメリカン唯一教徒聯合協會の他に一つの大米國唯一教徒聯合大會及び二十四箇の地方中會あり、而して此

の地方中會は或は一州或は兩三州に跨りたるものあり或は合衆國を區畫して西部諸州中會或は中央部諸州中會或は南方諸州中會或は太平洋海岸中會等ありて各々其の地方の教會及び俱樂部等より成立せり。又婦人傳道會なるものありて頗る其の勢力を全國に逞しふし其の他大米國唯一教徒日曜學校聯合協會或は西部唯一教徒日曜學校組合等ありて此等の傳道會又は日曜學校聯合協會等の出版部はマツサチウセツツ州ホストン府に於て其本部を設置せられ米國に於ける唯一教徒の内には彼の文學教育慈善政治及學術等に向て最も著名なる者實に夥多あり就中詩作の大家としてはブライアント氏、ロングフェロー氏、ホイチアー氏唯一派クエッカー(ホームス氏及びロウエル氏等あり、歴史學の大家としてはバンククロフト

氏、モットレイ氏、プレスカット氏、ヒドレツス氏及びバクマン氏等あり、教育の大家としてはホラスマン氏及び近頃八名のハアヴアード大學校々長あり、學術の大家としてはアガジィ氏、ヒヤアース氏、バウダウンチ氏、フヒスク氏及びレコンテ氏等あり、政治家としてにはエヴェレット氏、サムナー氏、ウエブスター氏、アダムス氏(同名の大政治家二人あり何れも唯一教徒)カルホーン氏、ホーラス氏及びカールチス氏等あり、法官には高等法官マッシュナル氏及びバートン氏あり、判官にはストーリー氏、ミラトル氏等あり、著作の大家としてはホウブル氏、ホーソン氏、リブレイ氏、テイロル氏等あり、婦人社會に在て著名なるはマーガレット、フリーラー、リヂヤ、メリ、チャイルド、ルクレシヤ、モット、ヘレン、ハント、ジヤクソン、メイ、エーリッヂ、アモニア及びヂユリア、ウード、ホウ等あり、

米國に於ける夥多の教會は未だ進んで唯一教會の名稱を冒かさざるも多少此の唯一教の主義及び信仰に感動せられたるは實際の事實なり唯一教徒は特に米國に在て彼のユニヴァーサリスト教徒とは多少相互に携帶するものにして、其他米國に於ける多數の自由思想を抱ける獨立協會は其の實際に於て盡く我か唯一教徒の協同労働者たるなり、其他唯一教徒は、印度に在ては彼のブラモソマージ(印度信神教徒)の好友なり、其の他萬國聯合協議大會と稱するものありて、世界各國の自由宗教思想家教役者等の團體にして合衆國、英國、佛國、阿蘭陀、獨逸、瑞西、伊多利亞、澳匈國、及東洋諸國の同志團體にして十五箇國、三十四宗派に亘れる協議會なり、而して此の會は一千九百年始めてポストンに於て組織せられ二箇年毎に各國に於て順次開催の都合にし

て、一千九百〇一年ロンドンに於て、一千九百〇四年アムステルダムに於て、一千九百〇五年ゼネヴァに於て、一千九百〇七年ポストンに於て開催せられ、一千九百十年八月其の第五回をベルリンに於て開會の都合なり、以上の事實によりて之れを見れば今日に於て此の唯一教の基礎たる思想上の自由及び合理的主義は全く近世の學術界に於ても認容せられたれば、此等學術界に於て起る處の協會或は其の他の團體の如き強ち唯一教徒の名目を冒かさざるも是れ亦同一の主義に因て成立せられたる事を了解するに足るべし。

唯一教と所謂正統派基督教との比較

問 神に關して如何なる差違あるや。

答 正統派にては三位一體の神を信じ、唯一教にては神を以て唯一なりと信ず

問 三位一體説の大略は如何

答 聖父の神、聖子の神、聖靈の神とし、此の三神は各自完全なる人格的性質を有し、更らに優劣ある事なし、故に父子、靈の三體は何れも其の光榮に於て威光に於て靈智に於て權力に於て等しく無限無窮なり、而して其の差異は聖父のみは自在にして、聖子は聖父の産み玉ふものにして、聖靈は聖父子より發光或は迸出す、然れども聖子、聖靈と雖も敢て始めあるに非ず、聖父と共に無始にして無終なりとす、此れ等三神は斯の如くなるを以て、各自一箇にて、其の無始無終、全智全能にして在ざる處なき、完全圓滿なる神たる状態は正しく三體唯一となりし時と同一なりと信仰せり、換言せば三位

一體の教理は神を以て全然唯一にして、又全然三箇なりとし、全然三箇にして、又全然一箇なりと信ずるものなり。

問 唯一教は何故に三位一體説を否定するや

答 吾人は人心自然の法則界に如此混雜なる論法を容る可き空虚なきを以て之れを否定するものなり、何となれば一箇は同時に三箇となり得可からざるが如く、既に父子、靈と區別して各々已てに完全なる人格的存在者と見做すと、同時に之れが個人的性質を否定せずして直ちに完全なる三箇神格を以て完全なる一箇神格と認識する能はざるを以てなり、況や子は父の産み玉ふ者とせば、父より後に出で、靈は父子より發出せしとせば、既に父子の後にでてたるを認めざる可からず、然らば何を以て三位は共に無始なりと云ふを得んや、數歩を譲りて、子と靈とは父と共に無始に自在せ

りとするも既に子として、靈として、父より出づると云へば、出でざる以前を追想するは、人心思想の法則にして實に止むを得ざる事と云ふべし、然らば子と靈とは即ち其の子と靈として出でざる以前に於て獨り父のみ自在したるものにして、子と靈とは勿論始ありし者なりと云はざる可からず、蓋し人の心裡に於て「原因は必ず結果に先つて存在せり」との思想は動かす可からざるものにして、人若し此の思想を撲殺せざる限り何を以て彼の説に隨喜するを得んや、既に産れたり、結果たりし上は何を以て無始なりと確論するを得んや、要するに三神一體の説にして人の理性を満足せしむるを得ば、何を以て八百萬の神を以て一體と信する説を非認するの口實あらんや。

問 三位一體説は耶蘇教の本旨なりや。

答 正統派基督教會に在ては三位一體の説を以て其の根本的教義とし、無論基督教の本旨なりとせり、何となれば、苟も宗教として所信の神の定義は即ち信仰の基礎なればなり、故に之れを否認する者は如何なる宗派と雖も正統なる基督教派と稱するを許さざるなり(非耶蘇主義)

之れに反して唯一教徒は之れを以て耶蘇教の本旨とせざるのみならず、ナザレ村に産れ給ひし大聖耶蘇の教訓を主張する者を以て基督教徒とせば、彼の三位一體説の如きものは全く基督教以外に置いて可なりと主張すべし、何となれば吾人否な何人と雖も新約全書の耶蘇の教訓中未だ曾て斯る神秘不可思議の論説を發見する能はざるべし、吾人は反て當時希臘附近に於て「ノステック」哲學として世に知られたる異邦人「プレトウ」の「ロゴス」説を其の儘基督

教の基礎に代用せしを知るに難からざるなり(耶蘇教主義)

元來此の説の耶蘇教中に混入せしは遠く紀元三百二十五年頃の事にして世の所謂「ニケヤ」の信條として曖昧なる三位一體説となりて顯はれ、次で「アサナシアス」信條として判然三位一體説を基督教中而かも其の根本的信仰箇條として採用したるものにして今日の所謂正統派の信仰の根據たる處なり。

問 神の屬性に關して正統派と唯一教との間に於て差異ありや。

答 神の屬性に就て正統派と唯一教との一致する處は其の差違の點よりも多きは勿論なりと雖も前條に掲げたるが如き根本的神の本性論に相違あるを以て、亦多少相違の點なしとせず、左に大體を摘録せば

一、正統派の神は恰も舊約書に所載の神の如く、此の宇宙以外に鎮

坐し玉ふ威光嚴として近づく可からざる帝王の如く、吾人々類は之れに近づくかんとするには必らず中保者即ち救主を要する事、恰も王侯貴族に近接せんとするには必らず先づ執事令扶の中保を要するが如し(專聖君主の神)

然れども唯一教徒の神は恰も新約書に所載の父にして、吾人に接近し、否な吾人の心裡に在し、仁慈圓滿なり、故に人若し神を去らんとするも神常に吾人と偕に在りて直接に吾人の言行を鑑み給へりとなす、況んや神は萬有の内外に遍在し玉ふの神なるを以て木石魚介の裡にも神融通し玉へりとす(遍滿なる天父)

一、正統派に於て神は嫉妬の神たり、何となれば彼の教裡によれば洗禮を受けて基督の中保を依頼せざる者は盡く神の前に祖先傳來の罪惡或は自ら知らざるの罪科に充滿せり、故に不正不義

を忌み玉ふ潔白の神は萬民を咒詛し田畑は耕作の勞を要し且つ人に生死の苦厄ありとす(舊約的嫉妬の神)

唯一教に於て神は純愛の神なり故に人類が何種の宗教を奉ずるも誠意誠心を以て彼れを需むる者に神は喜んで其の恩澤を感ぜしむるものとす加ふるに吾人は祖先傳來の罪惡或は知らざるの罪科あるを信ぜず猶ほ數歩を譲りて吾人に斯る罪科ありとするも仁愛なる天父は其の愛兒を仇敵視せず咒詛せざるべしと信賴す何となれば吾人は如何に自負するも自ら神の仇敵となりて反抗するの力ありとも思はざればなり(新約的慈父母)

一、正統派の神は放恣にして自己の前に宇宙の大法即ち神の法律あるを輕んじ容易に其の法律を變更し得る者なりとす譬は奇跡を顯はし天則以外の事物を表章し以て自己の爲めに人類の

歸依を買收せんとするが如し(放恣の神)

然れども唯一教に於ては神も亦自己の法律を確守せざる可からずとす何となれば神は全智の神なれば中途にして變更せざる可からざるが如き不完全なる法則を制定せざるべし加之神は不正を惡み玉ふ正義信實の神なれば神は自己に信實ならんが爲めに其の法則を蔑視せずと信ず(治法の神)

一、正統派にては神は天下既知の通則以外の奇跡を行ふが故に信認するに足れりと爲す(不可信認の神)

然れども唯一教にては神若し天下の通則を犯せば何を以て斯る神に信賴するを得ん何となれば吾人は神の不變なる律法により吾人智識の根元を培養するものにして吾人は此の世界に安心して居住するを得るは即ち神は未來永劫其の律法を變更

せず、昨日の経験せし事實は今日も事實なりと信認するを以て
なり、故に神態に奇跡を行ひ天下の通則を破壊せば吾人は斯る
神を信認せざるのみならず、寧ろ速かに斯る宇宙より消滅し去
らん事を欲す。(信賴すべき神)

問 耶蘇基督に就て如何なる信認の差異ありや。

答 正統派に在て基督は人間に非ず、即ち三位一體の一にして、無論完
全圓滿にして無限無究の聖子たる神なりと信ず、何となれば耶蘇
の此の世界に産れざる以前、猶太國に於て神は古代の豫言者と既
てに聖子を人類の救主として降し玉ふ事を豫約せりと爲し、彼れ
は其の生涯の言行に於て(説教と奇跡)又死後三日にして蘇り肉の
儘昇天せし大奇跡あるに依りて自ら神たるを證せりとす。(人なる
神)

然れども唯一教徒は耶蘇を以て全然人間なりとせり、何となれば
彼れ既に人の形體を以て人間の世の中にシヨセフとマリアな
る夫婦の愛兒として出産し、其の眠食居坐一として吾人と異なる
處あるを見ず、況んや其の傳記を一覽すれば或は喜び或は悲み或
は恐れ或は祈り或は飢へ或は疲勞し或は死を厭ひて悲鳴を發し
て上帝の救護を乞ひ、其の死するや尋常一様の人と異なる事決し
てあらざりし、斯の如き事狀悉く普通人間と差異あるを見ざるに
何ぞ疑惑百出の奇跡談のみにより直ちに神なりと云ふを得ん、要
するに正統派と唯一教徒の分岐せる由緣此の點に有りしものに
して、蓋し神の定義を根本的に異にせるを以て起れる必然の結果
なるべし、吾人は如何に千萬熱慮するも、神は自から祈りて自己に
救護を求む可しとなし、或は人間に捕へられ十字架上に非命の最

後を遂げ得可しとは何處の心裡を叩くと雖も想像し能はざる處なり。然るを況んや其の神は恣に天則即ち自己の意思を變更し水を以て酒と化し、死して三日の後肉の儘天の玉坐に復位せりとの妄説を眞面目に信認するを得可けんや。(人なる耶蘇)

問 基督を人間とせば彼れの教訓を信仰し得るや。

答 正統派にて宗教的教訓は神勅に非ずして單に人間の口より出てもものたらば如何に正當なる理論と雖も悉く之れを否定するが如し、何となれば耶蘇にして若し人たらば斯る大言放語を爲すは天を蔑視する者たりとなすを以てなり。(血統信仰)

然れども唯一教徒は何人の口より出づるものたるも正理にして公道に適ふ者は之れを信認する事、恰も正統派の信者が神の默示として信ずると毫も遜色あらざるなり。吾人は耶蘇の教訓を信ず

るは彼れは神の子たるが故に其の教訓は善美なりとするに非ず。換言せば吾人は師匠の血統を彼れ是れと論じたる後師の言に就くに非ずして師の訓諭にして吾人の心靈を満足せしむる天父の法規に適ひ、吾人の見て以て正理公道なりと認識するが故に信仰するものなり。故に耶蘇の血統の甲たり乙たるが爲め直ちに動搖するが如き信仰は所謂砂上の家屋に等しきものにして、吾人の信仰は人間の理性の上に基礎を確定したるものなれば人間の理性と其の運命を共にするものなり。(血統を信せず實際教理を信ず)

問 基督の死に就て意見の差異は如何。

答 正統派にて基督は萬民の罪を購はん爲め自ら罪なき身を神の前に犠牲に捧げ、以て神怒を和らげたる者なれば、人にして基督の神たるを信じ彼れに身も靈も委ぬる時は彼れの血に依りて人間の

罪科は盡く洗淨せられ神の前に義とせらるべし、夫れ神が人類の罪惡を怒り玉ふ事は自己の義に對して怒る者にして基督の如く潔白無垢の命を犠牲に供するに非れば決して仁恕す可からず、故に神は己れの義を全ふし又己れの愛を全ふせんが爲め自ら肉體を就つて此の世に降り自ら犠牲となりて萬民の罪を贖なへりとす、(他力贖罪)

唯一教にては斯る野蠻時代の人命御供を獻ぐるを以て其の怒を和らげるが如き邪曲の神を信ぜざるなり、況や自らの義心を満足せしめんが爲め自ら犠牲となるが如き外見のみを飾る神は之れを信ぜざるのみならず、斯る虚飾詐偽淺薄なる事物は賣主者の言として見る可きも、純潔正義の神の設計としては吾人の承認す可からざるものなり、故に吾人は自己の負ふ可きものを他人に委す

る者に非ず、(自力の革進)

問 人に就て如何なる差異ありや。

答 正統派にては人はアダム及びイブの原罪を遺傳し來れるを以て、人は生れながら神の前に不義者たり、故に人生は全然墮落の極度でありとせり、(人生墮落説)

然れども唯一教徒は決して斯る古代の小説的口碑に拘泥せず、進化の理法により人は劣等より高等に進歩せしものにして、今猶ほ進歩の中途にありとす、故に人生は墮落に非ず、反て昇進せりと信認す、(人生進化説)

問 歴史上人間は最初高等にして漸次末世に至るに従ひ墮落せりと
の證據ありや。

答 否、吾人は人間社會の歴史上墮落に非らず、反て昇進せる事實を

證明するに餘りあり、誰れか石器時代の人種は黄銅時代の人種より高等なりと云ふを得ん、況や鐵器時代、蒸氣、電氣時代の人種は石器と素焼の土器を弄する時代より劣等なりと云ふを得んや、又一個人の歴史に就ても、誰か核提の稚兒は丁年にして教育を施せる人よりも體力、智力、將た道徳力に於て劣等なりと云ふを得んや、況や人類は勿論生物一般の胎生中はその生熟、出産後よりも萬事に於て高等なるを得んや、惟ふに黄金世界を過去に追懐するは人間の弱點にして、天保時代の老翁は維新前に物價の下直なりしを誇ると一般にして、知らず當時に於ける人命の如何に廉價なりしやを要するに衣食住の不廉なるは人命の貴重なるに職由せるものなり、故に往古に比して吾人は如何に生命財産の安全なるかを思へば彼の人生の黄金世界は遙か將來にあるものにして過去にあ

らざるや勿論なり。

問 宗教の起原に就て如何なる差異ありや。

答 正統派の信ずる處にては宗教は須らく天啓ならざる可からず、然らざれば此の罪惡に充滿せる人間は決して完全無缺なる宗教を確立す可からず、故に耶穌基督(神)は自ら肉體を就りて此の世に降臨し、以て天上天下獨尊の宗教を人間に下賜し、以て千古不變の教法を確立せりと爲す。(狹義の天啓説)

今若し天啓無謬の宗教にして萬世不易のもの世にありとせば、唯一教徒は無論之を歡迎するに躊躇するものに非ずと雖も、如何せん世上實際斯る理想的宗教の現存なきを故に吾人は苟も認めて以て眞理なりとす可き宗教上の議論は天啓たれ、人爲たれ、何にても之れを尊信するものなりと雖も、實際人間社會の出來事は萬事

人爲を以て解釋するの遙かに天啓論を以て解釋するよりも穩當なるを覺ふ故に吾人は宗教も亦他の人事界の出來事の如く、人間發生以後に起りしものなれば固より人爲として取て差支なきのみならず、幼稚の宗教の姿の儘にて千古不變ならんよりは寧ろ日々に新にして又日に新たなる人生と相並行して將來に限り無く發達生長せん事を企望するものなり。(人爲或は廣義の天啓)

問

基督教と他宗教との關係に就ての差異如何。

答

正統派に在ては基督教のみは、天啓宗教の完全なるものとするも他の諸宗教は人爲的にして不完全なるのみならず、救道に入るは此の宗旨を措て他になきものなりとす。(排他主義)

唯一教にては、單に基督教のみを以て天啓なり、完全なりと云ふを否定すと雖ども、他の宗教も亦基督教と共に、人心自然の活泉より

噴出せしものなれば基督教と共に固より正邪混交するものにして、等しく兄弟宗教なりと認定す、只だ其の行はれし國々の文化の程度と其の奉教者の智識の程度により、之れが改良を加へしと加へざるとの差を生じ、始めて優劣を區つ可きものなりと雖も、根本的に邪教として排斥すべきものに非ずと信ず。(寛容主義)

問

天啓の字義に於て如何なる差異ありや。

答

正統派にては天啓の字義を以て狹義に解し、單に宗教即ち基督教にのみ限界し、且つ天啓に非ざれば宗教として眞の價値なきものなりと爲す。(宗教的事物に限る)

唯一教に在ては天啓の字義を廣義に解し、苟も神の宇宙に於て、萬象の上に現はるゝ眞理を覺知するは即ち天の啓示を蒙るものなりとするも、差支無しとす、然れども、是れ單に宗教界の事物のみに

止らんや、物理學も化學も動植物學も皆な盡く造化の工妙を吾人に垂示せるものを學びたるに非ずして何ぞや、故に宗教は神の聖靈人心の上に示現せる事物を了解したるものとせば、科學の眞理も亦天啓に非ずして何ぞや、蓋し其の差異は正統派に在て天啓は或る宗教的事物にのみ、一定の人と、一定の時代とに於て人類間に降下せりとし、吾人は之れに反して萬事萬端の事物の上に神は古今を選ばず、東西を問はず、賢不肖の差別なく無限の天啓を問斷なく降し玉ふものなりと解するに在り、(宗教的事物に限らず)

問 聖書に就ての差違は如何

答 正統派に在て新舊兩約全書を以て神の默示となし、完全なる宗教的眞理を人間に訓諭せし神勅なりとするを以て固より一點一畫の誤謬なきのみならず、人間社會は之れに則り萬般の標準とし、就

中宗教的事物の大憑據なりとせり、要するに正統派にては神の默示と完全と無謬とを單に聖書と稱ふる一部の書物に限るに在り、(單獨に聖書を信ず)

唯一教にては聖書は古代の人間の宗教的經驗と推測とを記録せる書籍にして固より誤謬あるを免かれず、而して普通一般の書籍の如く各々其の著者ありて全く人爲的に著作せるものなりと雖も、宗教的事物の記録としては實に有數の價値ある書籍なりとす、然れども之れを以て今日實際の世界に盡く應用する能はざるは恰も『古き皮袋に新しき酒を藏す能はざる』が如く、小兒の衣類は大人の着用に不便なるが如き點少しとせず、故に之れのみを以て盡く今日の人間社會の事々物々の標準となす可からずとなす、加ふるに聖書のみならず、社會に有益なる書冊、就中宗教道德に關する

書籍は廣き意義に於て一般に神の默示とし又或る程度までは完全にして誤謬少なきものたるを得可し然れども吾人は之れが爲め聖書中の真理にして誤謬なき論點を毫も損害するものに非ずと信ずるに在り。廣く一般の經書を信ず。

問

創世記の記事に就て意見の差違如何。

答

今日多少學識ある者は譬ひ正統派の信徒と雖も眞面目に六日間世界創造說、アダム、イヴの説、エデンの樂園說、ノアの洪水說并に其際製造せし方舟說等を信認するものなかるべしと雖も、彼れ等の信認する教義就中神の屬性、人類の墮落、惡魔救罪、四海兄弟說、十戒の起源、宗教の天啓たる由縁等は通例此の舊約書の口碑より來れるものなるが故、勢ひ其の記事を悉く創世記の神話なる一言下に抹殺し盡すを躊躇し、世界六日創造は六千年なり、唐の禹帝時代の

洪水とノアの洪水と殆んど相似たりとし、種々牽強附會の説を爲して之れを辯護するは一般に正統派信者の通癖なるが如し。(頑固)然れども唯一教徒は如此小説の記事は古代幼稚時代に於ける宗教的概念と政教一致の當時の狀態を口碑より集録せるものとして、一篇の宗教的神話小説と見るに過ぎず、何となれば人類は是非とも斯の如き幼稚の時代を經過せざれば、丁年の時代に達する能はざるを以て、一時斯る無邪氣なる口碑も眞實として承認せらるる時代は有り得可き事實なり、然るに今日斯る兒戲的説話を彼れ是れ辯護するは、寧ろ徒勞たるを免がれず、況や之れに種々なる理屈を附會するに於て、あや、故に吾人は——幼稚の歴史は幼稚の時代と共に過ぎ去らしめ、丁成の時代には丁成の活歴史を作らしめよ——と云ふに過ぎざるなり。(快活)

問 若し宗教を以て、如此神話小説的口碑の上に發達せりと爲さば、大に宗教の威嚴を剝脱するものならずや。

答 正統派にては或は斯る懸念を以て、飽くまでも聖書の無謬を主張するなるべし、然れども吾輩の見を以て見れば、敢て憂るに足らざるなり、若し宗教は兒戯に等しき劣等なる神話より發達せるが故に之れに威光あるなしとせば、吾輩は敢て斯る空虚なる威光を貪らんとは思はざるものなり、現に近世威光赫々として智識界を威壓せる天文學者の遠大なる智識と化學者の精緻嚴密なる智識とは最初虚妄なる卜星術と無謀なる煉金術とに起原せるものに非ずや、彼の有名なるダーウキン、スペンサーも最初は一滴の「アミューバ」原生質にしてコロネバヌも亦イタリヤ海邊の荷足り船の炊夫に過ぎざりし、況や其他をや、最初貧家の腕白小兒たりしの故を以

て關白秀吉の威光を左右すべきの道理あらんや、蓋し彼の進化論を忌む人の感情は、只だ人類は狝猴より進化し來れりとすれば、自己の飼犬にまで面目なく感ずる一片の感情のみに就て云々するに過ぎざるものにして、此の如き虚弱なる感情は眞に眞理を曲解し正道を廢頽せしめ、將來人間社會發達の運命を阻礙するものとし云ふべし。(甲は聖書無謬主義、乙は誤謬あるものなりとす)

問 宗教的奇跡の問題に就て如何なる差異ありや。

答 正統派にては聖書を以て無謬なりとするを以て、奇跡も亦實際歴史的事實として認むるものなりと雖も、之れ單に預言者、耶穌并に聖書所載のものゝみに限り、他宗に於ける奇跡異能は盡く否定し、或は時として悪魔が神に倣ひて人心を迷惑するものたるに過ぎずとす。(狹義の奇跡を信ず)

唯一教に於て奇跡の字義を廣義に解釋すれば、宇宙間一として奇ならざる無し、故に悉く之れを奇跡異能の現象と見做し、就中人の生命なるものは奇跡中最奇にして人は以て此の世界を靜止せしめ、又以て此の世界を回轉せしむるの力あり、(コーパルニカス及びガリレオ以前地球は靜止せりとし、以後は地球を回轉せりとなす蓋し前後兩説とも理論にして、實際地球以外より觀測實視せしに非ざるべし、然れども人智の向背に依りて靜止回轉に化す故に斯く云ふのみ)然れども所謂新舊約書所載の奇跡の如きは吾輩の全然承認する能はざる處にして、是れ未開幼稚の時代には往々有り得へき過信の結果にして、之れを以て歴史的事實なりと信す可き論據ありとせば、余輩も亦龍の口殉難記中の奇跡、其他各宗の奇跡も盡く歴史的事實なりとすべし、而して我輩は新約全書所載の奇

跡の如きは十中八九は一種の比喩的記事の文體と見做すに躊躇せず、何となれば基督が猶太國の宗教觀に一新機軸を樹てたるは、蓋し猶太國人の徒に物質即ち肉にのみ紐み外形の儀式に拘泥せるをば、彼れ耶蘇は心靈的に之れを轉化せしめんと勸めたりしものなれば、基督教の精髓は肉に非ず、靈なり、彼れ靈の糧を數千人の心靈的饑餓に供給せしものに過ぎず、何ぞ肉の糧を與ふるが爲めに辛苦せんや、其他病を醫すると云ひ、死を甦生すると云ひ、凡べて心靈の覺醒、心靈的治療を加へたるに非ずして何ぞや、然るに彼は之れを奇跡として肉の甦生、肉の療病と附會する者は、所謂基督を靈より肉に墮落せしめんと勉むる者に非ずして何ぞや、故に余輩が聖書を読む時は、靈眼を開かんが爲めに文字を素讀せず、其の精神を読む者なり、(狹義の奇跡を信せず)

唯一教に於て奇跡の字義を廣義に解釋すれば、宇宙間一として奇ならず無し、故に悉く之れを奇跡異能の現象と見做し、就中人の生命なるものは奇跡中最奇にして人は以て此の世界を靜止せしめ、又以て此の世界を回轉せしむるの力あり、(コーバルニカス及びガリレオ以前地球は靜止せりとし、以後は地球を回轉せりとなす蓋し前後兩説とも理論にして、實際地球以外より觀測實視せしに非ざるべし、然れども人智の向背に依りて靜止回轉に化す故に斯く云ふのみ、然れども所謂新舊約書所載の奇跡の如きは吾輩の全然承認する能はざる處にして、是れ未開幼稚の時代には往々有り得へき過信の結果にして、之れを以て歴史的事實なりと信す可き論據ありとせば、余輩も亦龍の口殉難記中の奇跡、其他各宗の奇跡も盡く歴史的事實たりとすべし、而して我輩は新約全書所載の奇

跡の如きは十中八九は一種の比喩的記事の文體と見做すに躊躇せず、何となれば基督が猶太國の宗教觀に一新機軸を樹てたるは、蓋し猶太國人の徒た物質即ち肉にのみ紐み外形の儀式に拘泥せるをば、彼れ耶蘇は心靈的に之れを轉化せしめんと勸めたりしものなれば、基督教の精髓は肉に非ず、靈なり、彼れ靈の糧を數千人の心靈的饑餓に供給せしものに過ぎず、何ぞ肉の糧を與ふるが爲めに辛苦せんや、其他病を醫すると云ひ死を甦生すると云ひ、凡べて心靈の覺醒、心靈的治療を加へたるに非ずして何ぞや、然るに彼は之れを奇跡として肉の甦生、肉の療病と附會する者は、所謂基督を靈より肉に墮落せしめんと勉むる者に非ずして何ぞや、故に余輩が聖書を讀む時は、靈眼を開かんが爲めに文字を素讀せず、其の精神を讀む者なり、(狹義の奇跡を信せず)

問 洗禮に就て意見の差違ありや。

答 正統派にては、人若し洗禮を受けてアダム以來の遺傳的罪障を盡

く洗淨して基督の教會に加盟せずんば如何なる善人にても善人たるの價なく隨て救の道に在らざれば、死後審判の日を俟て無限永久の苦行を地獄に於て受く可しとす、故に此の禮や人生の一大要件にして嚴肅なる可きは勿論、或る教會に於て頑是なき小兒は未だ悔改の思慮なきものとして斯る嚴肅なる禮典に與る事を許さずとせり、要するに人悔改の念を起し教會に加入せんとする時は必らず先づ施行せられざる可からざる一大事件にして、是れ即ち正統派基督教會の關門たり、(洗禮は試金石) 唯一教に在ては洗禮を以て敢て教法の二重要件となさざるものなりと雖も、加盟企望者にして自ら洗禮を受けて入會せんとする

者に向ては強ち拒絕する程の事もなかるべし、元來耶蘇は曾て傳道を開始せんとするの當時ヨルダン川畔にて洗禮のヨハネより此の禮を受け、又其の徒弟に向て福音を傳ふると同時に此の禮を行ふべしと命じたる古事により、基督教徒は恩師の在世中施行せられたる一種の身漱の禮の風俗を以て彼れの徒弟と他の者との區別法となせしに過ぎざるなり、故に吾人の眼より見れば彼の佛家は印度敬禮の風俗合掌を以て佛を拜するの禮と徑庭あるものに非ずとし、單に其の教法に附隨せる一種の風俗たるも、之れに依らざれば以て救濟の道を成就す可からずと爲さざるなり、我が國にて罪人又は花流社會に在りし者が、一旦舊慣を脱し正業に就くが如き場合を稱して「足を洗ふ」と云ふが如きは心の淨化を以て肉體の足の不潔を洗淨するに比するが故に、強て或る禮法を採用せ

んとせば足のみを洗ふも可なり、全身にても頭髮にても敢て關する處あるに非ず、然れども本來吾輩の信仰は如此外形の儀文に流れんより、寧ろ精神的の熱心なる靈火の洗禮を以て勝れりとなすものなり、故に唯一教にては入會者の所望に非ればかゝる儀式は必用とせざるなり、本人の所望に任す。

問

祈禱に就ては如何なる意見の差異あるや。

答

正統派にては祈禱を以て神と人との交通となし、祈禱に依り隨分事物の成效せし例證を擧げ、以て祈禱は必らず神の傾聽を促がし且つ之れによりて天祐を得るものなりとし、或は日々の勤業として、或は食卓に就く時の如きは必らず祈禱し、或は日曜日其他の宗教的集會の席には必らず祈禱を以て始め、祈禱を以て終るの常則あり、(神の必聽を期す)

唯一教に於ても亦之れと同一の考を以て祈禱を爲す宣教師も少なからずと雖も、余輩は一個人として祈禱に就き眞に世人の想像するが如き直接の効力あるものなりや否やの點に就て大に疑なきに非ず、現に基督が教會或は街の隅に立て高聲に祈禱をなすを戒められたるを以て見るも、今日彼れの言行を一も二も無く人生の尺度定規となせる人々が、形式的の祈禱は大に謹まざる可からざる筈なりと思考す、況んや祈禱其のものに依りて神の傾聽を促がし、自己の所願を成就せんとするが如きに至ては、無理屈も亦甚だしと云ふ可し、何となれば神は既に此の宇宙の成立以前より、其の天則律法を制定せられたり、二例を云へば、勞する者には之れに相當なる報酬あり、因果の應報は了然として、斷定め玉へり、然り而して人若し或る結果を得んと欲せば必らず先づ其の原因を蓄

積せざる可からず、然かする時は祈らずとも期せずして天祐を蒙る事明らかなり、サリトテ余輩は善意の祈禱を以て全然皇天に達せずとは断言する者に非らず、何となれば此の如く宏大無量の神の名を呼ぶの祈禱に非ざるも譬ひ極微細少の人心の運動と雖も此の宇宙は全體にして人心は其の一部たる限り、一部の震動必らずしも全體に皆無關係なりと云ふを得ざるべし、然れども其の關係より生ずる結果の微少細末なるは、僅かに皆無と問一髪を隔つるのみと云ふに在り、故に曰ふ、祈禱は即ち人心の震動にして、此の震動は必らずしも宇宙の大原因たる神と全然無關係なりと云ふ能はざるも、其の結果の細微にして皆無と等しく、且つ其の願望を達せんとするに當てや、祈禱以外に神は既に其の道を設けられたりと信ずるに在り、必聽を期せず。

問

祈禱の効用の有無如何。

答

今左に理學の大家ローバートソン氏の所説を引き、祈禱に依り物質界の上の一の新變動を起さしむるの如何に困難なるやを説明せん、曰く、試みに吾人をして海邊に於て波浪の爲めに陸上に打ち上げらるゝ處の一つ砂礫をして、猶ほ三尺斗り陸上に高く打上げ玉へと神に祈求せんに、神は此の祈禱を聞かんが爲めに如何なる作用を爲さざるべからざるかを験せしめ、彼の砂礫は波浪の力に依て陸に打上げらるゝものなれば、今之れを猶ほ三尺上方に押し上げんには、先づ神は此の原動力なる波浪をして之れに適當なる勢力を與へざるべからず、而して此の波浪をして動搖の度を高めしむるに當てや、次に波動の原動力なる風力をして尙ほ一層強大ならしめざるべからず、次に風力の原動力なる大氣の熱度に異

變を來さざるべからず、次に大氣熱度の原動力たる遠き太陽の熱度を變化せざるべからず、如此順次其原動力に溯りて變化せしむるに非ずんば能はざるなり、故に神は一砂礫をして今打上げし處よりも猶ほ僅に三尺の高度に之れを押し進むるに當てや、世界創造は勿論、宇宙創造の時より豫め用意周到ならざれば得べからず、且つ此れと同時に此の砂礫を三尺上方に押し上げしより、未來永遠に至るまで之れに伴ふて起る處の結果をも變化せざるべからざるに至るべし、然らば今天然に行はるゝ處の一小出來事を變化せん事を神に所求するは則ち神に向て宇宙創造の始めよりの天則に一變動を起さしめ、神の豫め定め玉ふ處の將來の運動にも亦永遠の變化を起させ玉へと希ふに等しく、理屈上決して神は許す能はざるものたるや、萬々明瞭なり」と

翻て今實際に照して之れを驗するも、亦斯の如き兒童的祈禱は神の聞召し賜はざる實例を知るに容易なるべし、茲に豊作を祈る農夫あらんに、毎日神饌供物を捧げて神慮を慰むると雖も、必ずしも毎歳の豊作を期すべからず、時として神は隣家の不信心なる者の田畑に幸し、反つて熱心なる所求家の田畑を災ふ事例等往々見して之れあり、此の如く神は吾人の懇求を傾聴し玉はざるにも係らず、猶ほ吾人の胸中依然として他物に依頼するの動念休止せざるあり、斯る場合に當り吾人は靜坐して仁愛の源泉たる天父の前に拜跪する時は、今まで憂悶に堪へ兼ねし心を翻へして、再び人生の艱苦を忍を得るの勇氣を鼓舞せられ、或は之れが爲め死地に臨むも敢て屈服の色なきのみならず、死と共に凱歌を歌ふを以て非常なる愉快を感ずる事あり、惟ふに斯る場合に當りて、人は祈禱の方

便により自ら強しと感ずるものにして、所謂反響或は反射的作用によりて自ら強しと信じて強くなるものたるに過ぎざるべし、約言せば正統派の祈禱に對する意見と、余輩の意見とは、甲は神の必聽を信じ、隨て之れが爲め物質的の上にも神の特別なる變動を起さしむるものとし、且つ祈禱を以て日常の課業の一となすが如き形式に陥るものにして、乙は全く神が口頭の祈禱を傾聽せざるものとし、隨て之れが爲め物質上に變動の起る可きものに非ず、且つ形式的の祈禱は自己の感情を満足せしめんとする一種の方便として軽く之れを見做し、神は吾人の企望を聽納し玉ふ可き他に道ありと信ずるものにして、此の道とは人々の力行なり、故に余輩は智識的、道徳的及び職業上の勤勉は即ち活ける祈禱なりと云ふ、(反射的効用を認む)

問 信仰の標準に就て如何なる差違ありや。

答 正統派に在ては、各々一定の信仰箇條なるものを制定し、以て動かす可からざる信仰の箇條とす、故に之れを盡く信ずるに非ずんば、以て正統なる教會員たる事を許さざるものなり、(信仰箇條を有す) 唯一教に在ては、全く信仰の標準を定む可き信仰箇條を制定せず、反て各人各自心靈の判斷に一任するものなり、何となれば古人が自己の信仰を以て後世の人を厭制すべき權利無きのみならず、古人が最初其の信仰を確定せしも、亦各自心靈の判斷を以て正常なりと認めしに過ぎざれば、今人と雖も亦古人に倣ひ自己の心靈の認容する處を以て、信仰の標準を立つ可き者たるや、明らかかなり、任他古人の制定せし信仰箇條にして、正しく誤謬なしとするも、斯る神學の博士等が額を鳩めて、多年の辛苦經營を積み以て宗教上の

事物を數條の信仰箇條中に蒸溜せしものなれば之れを以て初心の宗教入門者に向ひ充分信仰すべしと強ゆるは恰も帝國の憲法學者等が多年辛苦の結果として成立せる帝國憲法を老嫗や小兒に向ひ全然信認すべしと強ゆるに等しき者にして、老嫗兒童は眞心より之れを以て帝國治安の基礎なりと信ずとするも、何を以て斯る隨信より活ける解信を望むを得可けんや、況や神學上の婉曲にして高尙幽玄なる箇條を胡椒丸呑みに信ずるに於ておや、故に唯一教に於ては敢て斯る羈絆を制定して人心の自由を拘束せず、只だ人心自然の法則として正義公道の中心點に人心の流注する事恰も水の低に就くが如しと信ずるのみ、信仰箇條を有せず、救の道に關して如何なる差異ありや。

問

正統派にては、人にして如何に宿世の罪業深きものと雖も、悔ひ改

めて主なる基督を神として信仰し、洗禮を受けて教會に列し、各教會所定の信仰箇條を一意專信する者は、基督が十字架上に流せし血によりて其の人の罪科は購はれ、神の前に全く潔白なる者となり、死後審判の日の後は究りなき榮耀榮華なる天國に至り、未來永劫神の左右に奉事するの樂ありとなす、(他力救濟)

唯一教に於ては、人若し眞實に前非を悔ひて基督の如き仁愛の生涯を送らんと期する者は、已てに天國の門戸に一步を踏み入りし者なるが故に、以來益々勉めて自己の内に潜在せる靈光を發揚し、同胞の爲め、人類の爲めに盡し、死をも辭せざるの熱心を其の行爲に顯はせる者は、既に天國の住民なりとし、敢て天國に到るに死後を俟つ可きものに非ずとす、之れに反して、人日々に其の惡行を募り、再び此の世にて悔改の道念を起すの機會を失ひ、自己の爲め

又他人の爲めに不利益なる行爲と思想を抱ける者は既に地獄に墮落せりとなす、何となれば天國地獄とは未來世に於て遙か西方に極樂ありとか蒼空の上に天國ありとか天國を以て地方的場所となさず吾人は反て人の心靈活動の状態の上に天國と地獄とを現象するものとするを以てなり、然らば唯一教にては基督は吾人の罪科を購はんが爲めに死せりとなさず、反て吾人をして基督の言行に鑑みて正義の爲め、人類の爲めに己れを失ふ者は即ち其の心霊に天國の状態瞭然として反照せりとの實證を示せる者なりとす、何となれば吾人は自己の罪科を他人に負擔せしめ、以て恬然たる能はざる道義的動物なればなり。(自力救済)

問 信仰の價値に就て如何なる差異ありや。

答 正統派に在ては、聖書又は信仰箇條に明記せるものを以て眞實な

りと信仰するものにして、萬一過誤あるも信徒たるもの其の責に任ぜざる可し、何となれば是れ聖書或は信仰箇條の誤謬なればなり。(無責任)

唯一教は、各自心霊の理非判斷力、即ち自己の道理心を以て唯一なる信仰の標準と定むるを以て、萬一其の信仰にして過誤あらば必ず自ら其の責に任ぜざる可からず、然れども若し正理公道に適ふものならば、必ず名譽の天冠を受く可き權利あるものなりとす。(責任あり)

問 教會に就ての差異は如何なりや。

答 正統派の教會は全く寺院或は神殿に等しきものにして、祭壇或は禮拜所とし、宗教的眞理の説教所とし、單に宗教的儀式の公行所とするに在り。

唯一教にては、神殿に加ふるに宗教倫理、社會の事物を攻究する處の清き學校とし、或は教會に於て學術の深奥なる真理を討論する敢て不可なきなり、何となれば萬有の事跡を追究するは即ち造化の妙趣を味ふものなればなり。

問 布教の目的に就て如何なる差違ありや。

答 正統派に在て、基督教を他國に布教するの目的は、其の布教地の人民を以て未だ眞誠なる宗教の何たるを解せざるものとなし、隨て其の人民は今や地獄の烈火の周圍に彷徨しつゝある者となし、自ら救主に代りて眞正なる天啓の宗教を宣言布告し、彼れをして自己の宗旨に改宗せしめ、以て救済の道を成就せんとするに在り、故に在來其の地に行はるゝ宗教は勿論之に附帶せる總べての風俗習慣を打破して、以て盡く自國の風俗習慣に轉化せざれば止まざ

るなり、換言せば自己の信奉せる基督教の版圖を擴張するを以て目的とするものなるが故に、其の新開地に建設せらるゝ處の教會は萬事萬端盡く母國の教會と同一なる性質を有し、少しも其間に差異なからしめんとするものなり。(教會の版圖擴張)

唯一教の布教の目的は、敢て他國人在來の諸宗教を以て全然邪宗門として排斥する事なく、公平に自他の宗義を研究し、各自其の不足を補足せしめんとするに在るものなれば、其の合理的にして人心自然の宗教的感情を満足するに足る可きものは自他の差別なく、歡迎し、又不合理なりと認むるものは之れを學理に照らし、實際の事物に徴して、遠慮なく攻撃し、以て傳道地の國風に順應し、最も健全なる宗教を其の國に建設せんとするものにして、唯一教徒は一方に於て師たると共に一方に於ては學生たるものなり、其の目

的は正統派の如く自宗の教會版圖を擴張するに非ずして、自他相融通し、以て將來人の心靈を安全に依托するに足る可き宗教の基礎を定めんとするものなり、故に其の國民の何宗に名籍を列するに關らず、自由にして合理的信仰を抱き、宇宙の大原因たる神(佛)とて眞如とても名稱は實體に非ざれば何れにても可なりを信仰する者と共に手を執り、一個人より一國民に及ぼし延て四海の内に仁愛の道を宣布せんとするに在り、其の布教方法としては、他教の短所を説破する事なしとせず、然れども之れと同時に其の長處は飽くまでも宣揚せんとするものなり、何となれば他教の長處は又自己の所信の長所にして、之れを顯揚せんとするには、勢ひ迷信誤謬の執着を破せざるを得ざるを以てなり。(有無融通)

問

普及力の差異は如何。

答

正統派に在ては、既に眞理にして動かす可からずと断定せる標準を以て之れを明解するとせざるに論なく、知らざる點は信じて之れに従へば可なるものなるを以て、普通一般智識的下層の人をして信仰せしむるを得可し、況んや之れを布教するに人情の弱點たる死苦の恐怖心を應用し、未だ經驗せざる未來世の天堂と地獄を論じて以て單簡なる信の一點に依りて、他力の救済を保證(危険なる保證なれども)するが故に、未だ宗教的事物に縁の遠かりし人々は社會に於て相當なる智識と位置を有するにも係らず、一時之れを信仰する事あるべしと雖も、久しく其の教會内に在て、實際宗教的事物に思を寄せて考慮せば、何人と雖も怠惰なる他力の救済信仰箇條の上に置ける無責任の信仰及び知らざる點は信仰なり。底の信仰には終に倦厭を來たし、識らず冷淡無感覺に陥る事ある

は實際の事實なり故に正統派の教義は其の普及力を比較的智識の下層の人々の間に有するものと云ふを得可し。唯一教に在ては一定せる信仰箇條を有せざるが故に殆んど茫漠として所信の標準に迷ふの感なきに非ずと雖も既に信仰の根據を人の心靈に置ける限り人として心靈なき者何れの世にか之れあらん心靈のある處に活ける標準赫々の先明を放て潜在するにあらずや蓋し人は眞理を以て之れを遠きに求めんとし反て自己の内理に眞理の燈光耿々たるを知らざるなり唯一教の布教は即ち此燈光の所在を諸君に指示し以て諸君の反省を促がすに在り然れども吾人の常に耳にする處は「唯一教は理論高尚なるを以て學識ある者は之れを歡迎す可き者なるも反て一般の愚夫愚婦をして眞理の曙光を拜せしむるの道に非ず」と然り論者と雖も已

でに智識的人々の歡迎すべき此の公平合理なる道たるを知らば何ぞ百尺竿頭一步を進めて吾人の布教は空理を天外に談ずる者未來の天國地獄を説く者に在らずして苟も人間の心靈を指さして其の反省を促がす者たるを知るに至らば一考を費さざるも猶ほ愚者の心靈も亦自ら省察するの力あるを知るに至らん何となれば人にして自ら反省するの力なきに何を以てか普通宗教家の主張する遠き未來の賞罰天國地獄の神秘不可思議の玄理を覺知するを得んや論者は愚者にして猶ほ遠き未來を見るの明ありて近き自己今日の心の状態を見るの明なしとするか是れ所謂「秋毫の末を察して輿薪を見ざる」の類に非ずして何ぞや宜なりイソップの物語に曰く「人の眼は先きの方に向て顔面に位せり故に後方に在る自己を省る能はず」と是れ論者の意を付度せる者なるか

問

唯一教は正統派に比すれば否定する處のみにして破壊的即ち消極的なりとする批評に對し如何なる答辯ありや。

答

此の如き批評は所謂近眼者流皮相の見にして事の實際を知らざれば固より齒牙に懸くるに足らざるが如しと雖も世間は往々皮相の見に誤らるゝ例無しとせず故に今左に數條を相對比し以て何れか消極にして何れか積極なるやを知るの便に供せん。

一、正統派にては三位一體の教説を信仰して數理上の原則を否定し「バートン」(人格)の意味を曲解す。

唯一教にては三位一體の教説を否定す然れども數理上の原則と「バートン」(人格)の意味を曲解せず。

一、正統派にては神と宇宙の縁を遠けて世界を以て既に惡魔消極の配下に投下せられたりとす。

唯一教にては神は宇宙に遍滿するものなれば此の宇宙は善意(積極)の世界なりとす。

一、正統派にては惡魔(消極)の存在を信ず。

唯一教にては惡魔の存在を此の善積極の宇宙に許さず。

一、正統派にては基督を神なりと信じ單純なる人間たるを否定す、唯一教にては基督の神たるを否定するも人たるを認定し人間は

必らず基督の如く純潔なる生涯を遂ぐるを得べしと信ず。

一、正統派にては人間の黄金世界は古くアダムの時代に在りとし、以來の人間は盡く墮落(消極)せりと信ず、隨て人間の價値は滅亡なり(消極)と信ず。

唯一教にては黄金世界は將來に在るものとし、人生は決して墮落に非ずして昇進なり(積極)と信ず、隨て其の價は永生なり(積極)と信